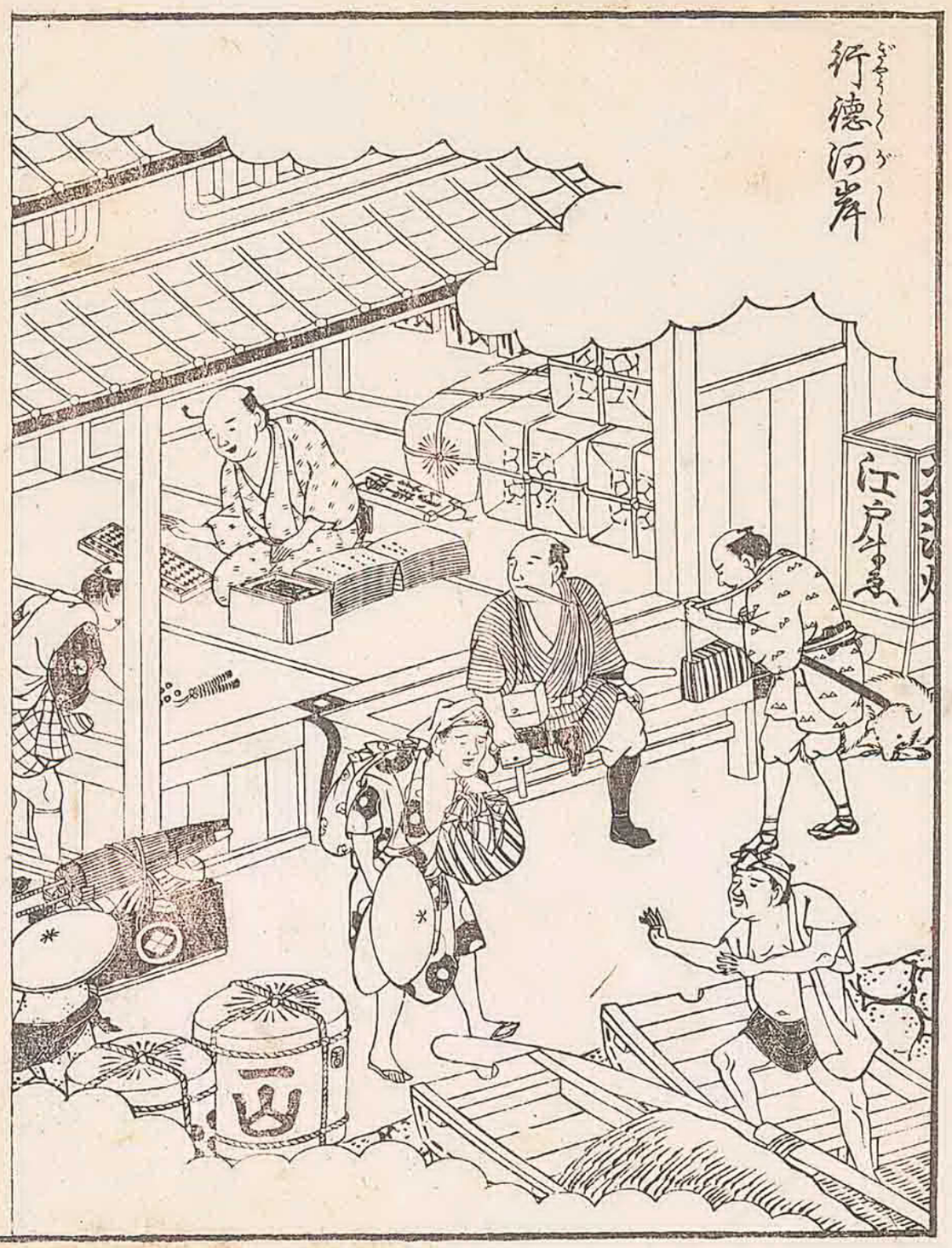
五

木曾路名所圖會卷之五

目録

○江府日本橋　○行德
○釜ヶ谷　釜ヶ原
○大宿　○太蘭
○神崎　○香取
○八幡　○八幡宮
野の銅駒
桑紅場
香取神社
○白井
坂東三郎
○息栖社
霞浦
高天原
鹿島
鹿島神社
鹿島七不思議
鹿島年中行事
常陸帶神事
麻嶋古城
廣圓寺
○麻生
○玉造
○板久

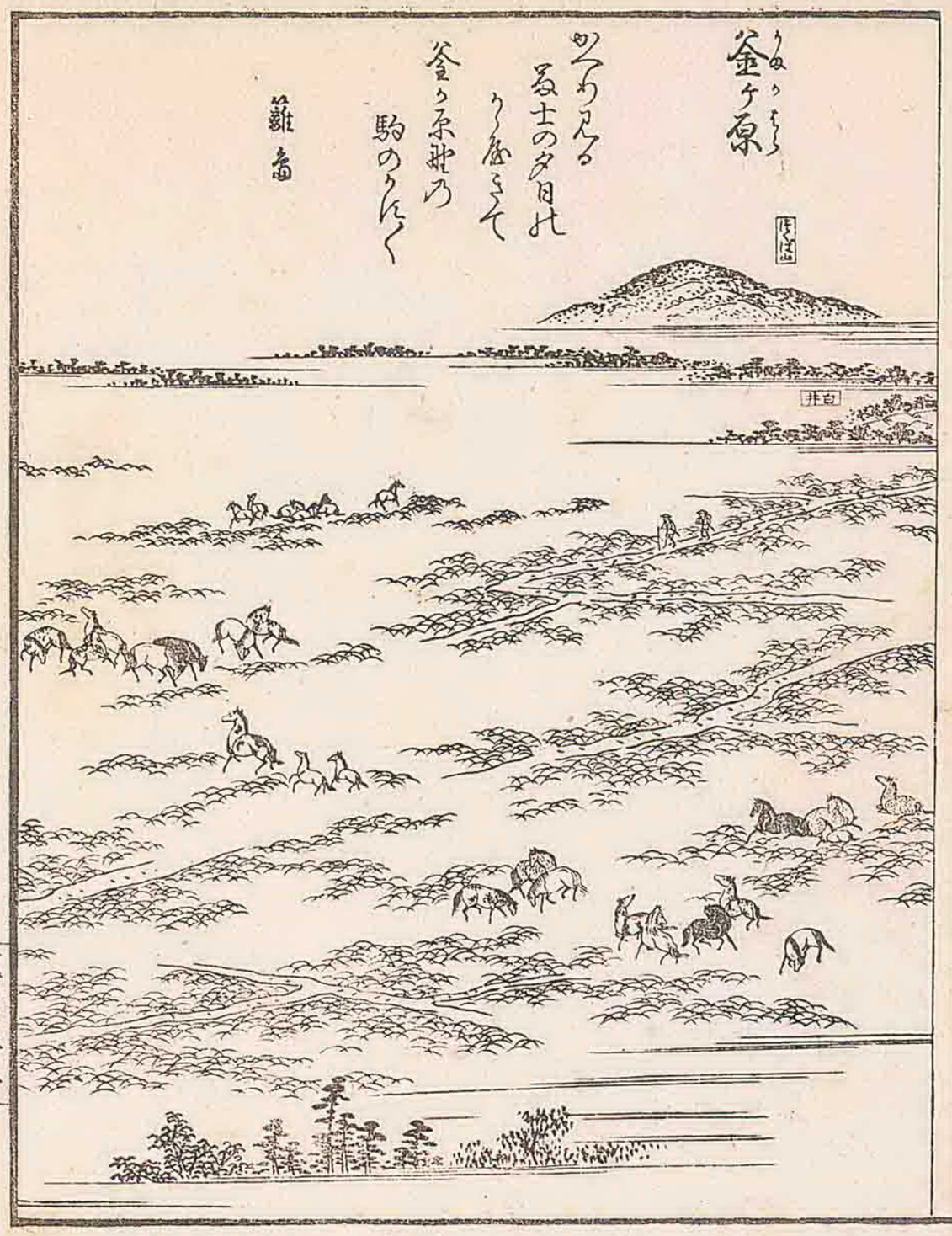


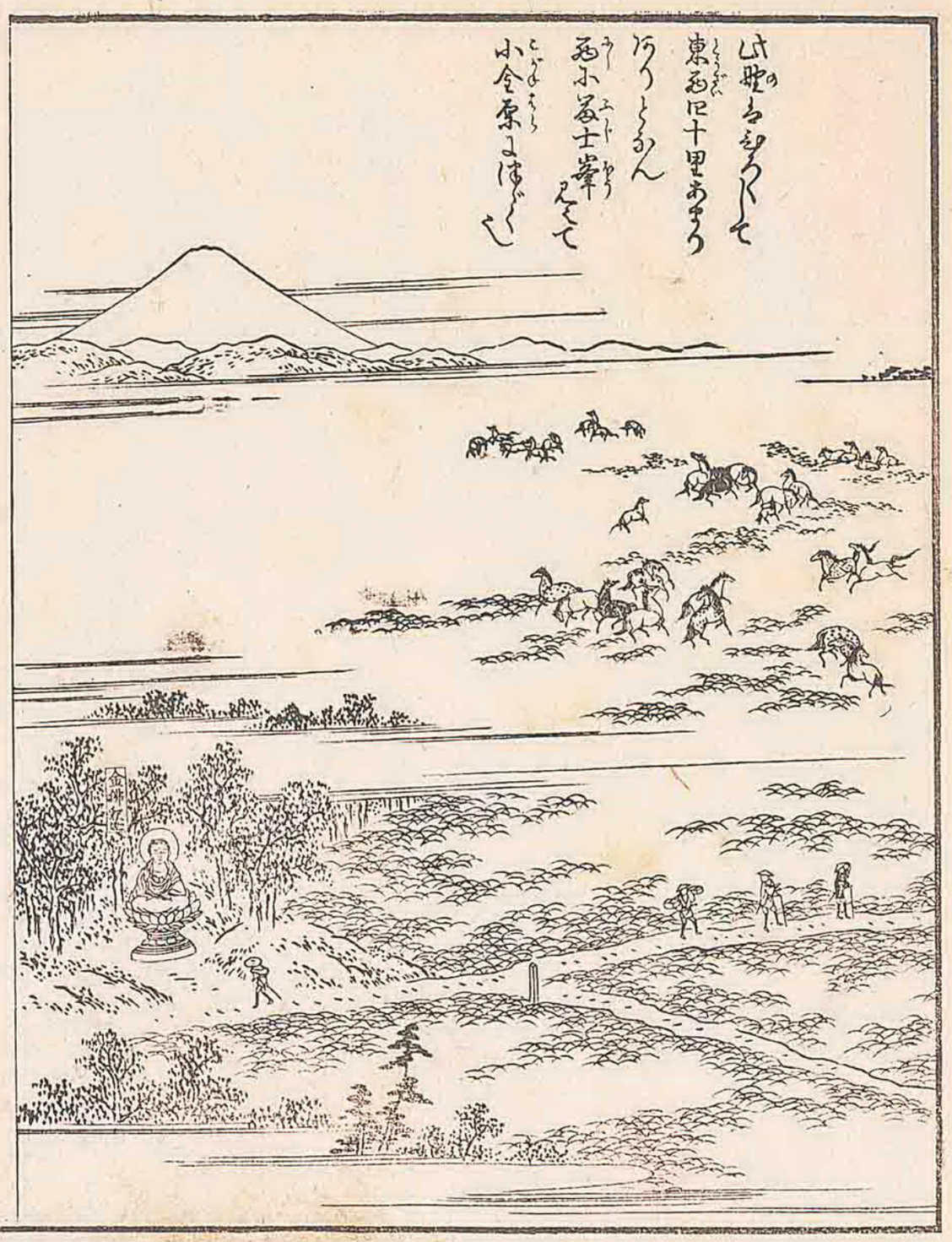
○小川　○府中
筑波山中禪寺　千手岩窟　三重滝　鶏石　月讀社　男躰社　陸奥峯女躰社　安産石　赤盞烏社　白雲滝　おふる堂　美那濱　求聞持堂　大沢堂　聖矢堂　二神行幸所　日讀社
○小畑　○十三塚
○椎名　間壁
○真岡　○小栗
間壁川　小栗
○宇都宮　宇都宮社　左右回廊　多宝塔
○足利　○本嵜
足利学校　孔子廟　小野篁の廟　神楽殿　記念堂　宇都宮社　猪田光社　下野十社の神官　天神
○左田
室八島
○富田
二子山
○芝　○五料
○合戦場　○椽木
天明釜
○天明
安蘇川
○梁田

釜ケ原

ひかれる
富士の夕日は
うつくしくて
釜ヶ原野の
駒のうたく

蘭斎





此野の西の方にて
東西に十里あまり
ひろくして
西は富士嶽
小金原よりはじめ

日本橋（江戸）

吾妻の神社香取息栖鹿島の三社をうつして日本橋の邸宅とする

て行徳の富人形よりもおんなこまの小網町二丁目の紙漉河岸より紅毛渡

りつくまでおんな山川を土河筋の枝川をもて元紙小名本川より石垣

庚申塚より右へ大伝馬町にて工商の家く山町より五百羅漢の

佛寺なり元亀年中の天神も狂言中川の御関所より守屋眼

をうりてゆきつけ人をうるゆきつけ人をうるゆきつけ人をうる

東方西りの家ゝみな新宅小あゝど村角村小のゝ小田畝紙見る

釜ケ谷 下 絵

白井まで五里ゝて邑里紙見てく田中ゝ紙りたゝ小見ゝく
田園隙くたりある耕ゝ作る人玉黄をうゝて笠紙うゝ作る紙ゝ
さゝいづくをゝゝあゝたちかゝあゝ山和尚田畑の畑迄小ゝ民
稼穡の器ゝり用ゝ水雑ゝ作ゝ稲穀を穫ゝ夏の雨をゝぐゝ家
老ゝの稼ゝくゝ九穂紙見て三枝紙ゝ山歌を家長庭ゝ
林園ゝ行ゝく釜ケ谷ゝ小前小至神ゝ山野を眺ゝゝて夏仲
風ゝて風紙廣ゝゝ小神園の弱ゝ六十だゝ山野ゝ分ゝれゝ何れも
手紙ゝさゝて遊ゝぶゝゝとをゝゝて何ゝの馬ゝと人家ゝ出ゝ家ゝまゝ
公官の御馬ゝて馬寮のゝ人ゝ小神園ゝ駿馬紙撰ゝ行ゝをゝり見小
親馬動ゝば其ゝゝも神小法ゝゝゝ敏ゝゝる馬小ゝゝも及ゝ
そゝ中紙ゝりゝば多ゝの駒人を馬ゝゝ早ゝく服の勇ゝ近ゝゝ山神
より西ゝゝ方と顧ゝゝゝゝ空ゝゝゝゝて小富士峯

あゝゝ小見ゝる江戸紙ゝく又見ゝ見ゝりゝて西行を
ゝゝゝゝ空ゝ雲の空を隙む斜脚ゝゝ小西金小近ゝゝ日の入極小
白井小見小

白井 下 絵

大森まで二里ゝ前ゝ民居濃ゝゝて駅ゝゝ小ゝを小ゝゝ外家ゝ両
三町ゝるゝゝゝゝゝそゝ中ゝを高崎ゝ形ゝ屋ゝて一家紙濃ゝゝ表を
ゝゝく野紙ゝ林を通ゝて大森ゝ前小ゝる山西ゝゝの浮ゝゝ
ゝ金ゝ地ゝゝく家長多ゝく百人ゝ農の茅屋ゝ多ゝくゝて
村のゝ小坂ゝ

大森 下 絵

木曽まで芝町又野を過民家紙通ゝてゝある墓所の居をゝゝ
て頭ゝゝを農家紙多ゝ百ゝ中ゝ木曽ゝ小前小ゝる
森宿まで紙宿十一里ゝ前ゝ民家多ゝくゝて茶屋も又多ゝ駅ゝ
宿小入ゝゝて神ゝゝ紙出ゝまゝ何ゝの橋宿小橋房ゝて

木曽 下 絵

山紙舎小入ゝ前の名ゝゝゝ紙ゝけゝ赤ゝ墓ゝゝゝて岩の紙ゝ

本嵐

山部赤人

坂東方面を

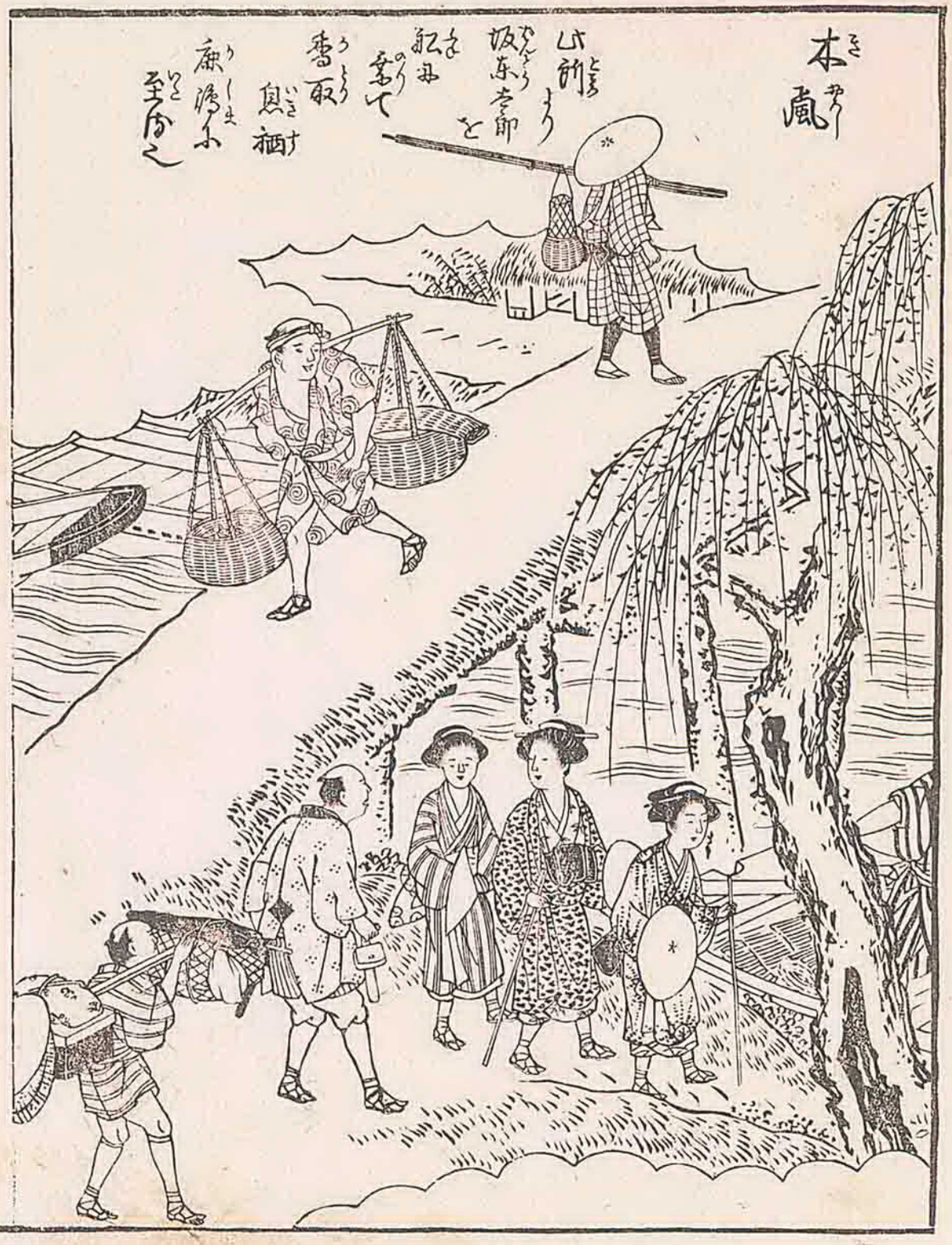
紀ゆき

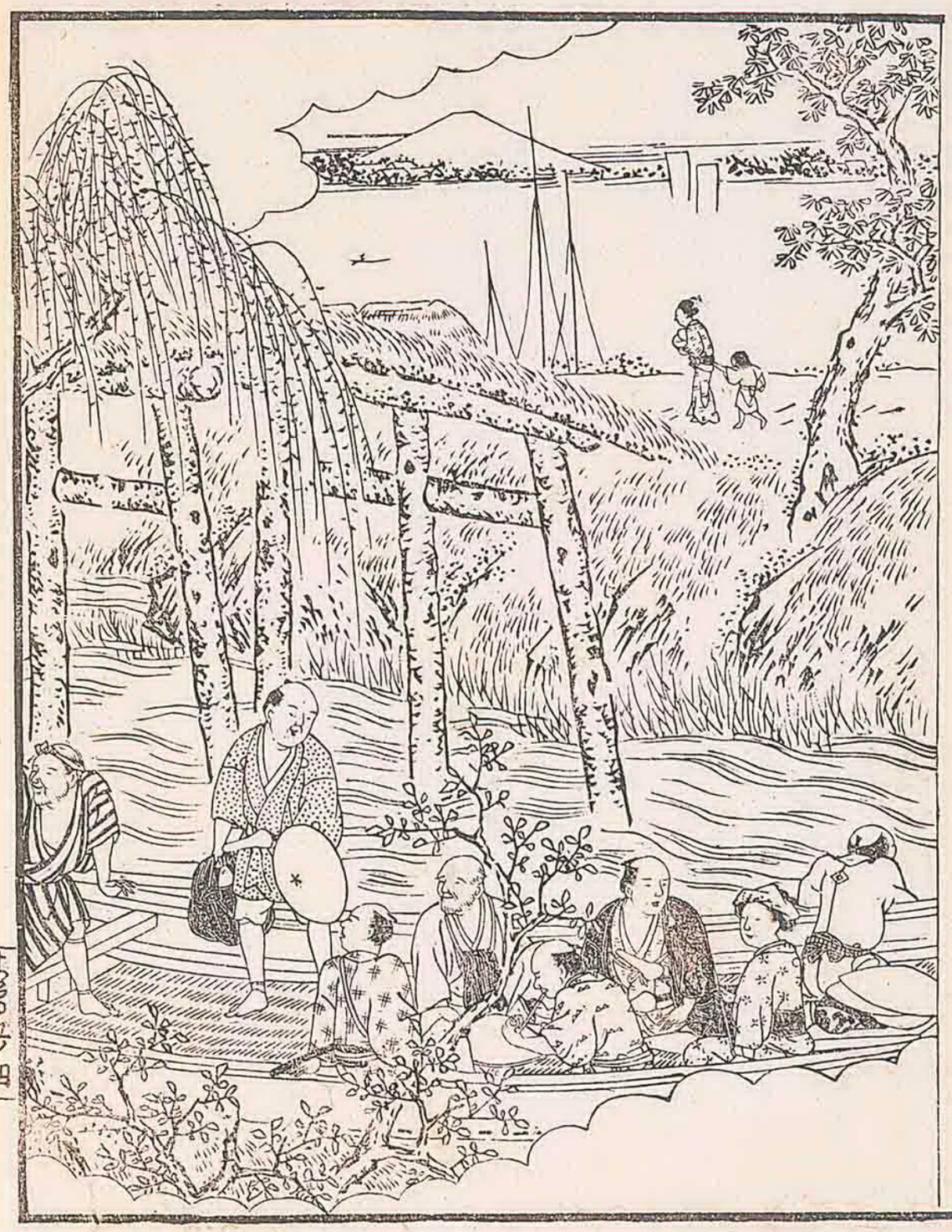
雪取

息栖

麻績ふ

至る





まゝく磯の波を白くして五色小今一色ぞたゝめと土佐日死のありしけ小
叫ゝ小ましきゝ小く麻倍自島梅香而へ治ゝて神ゝ筑波山の叫ゝ人
赴くゝ紙ゝ仁船師へいひゝ甚ゝ小船を走ゝ小ゝ小ゝ袋綴
をゝて至合ゝて〻ゝく搖ゝ仁ゝを船を出ん小船ゝれを見狂くゝ〻
夏の天ゝ暑も河風小涼く狂波の高海ゝ左右の岸船小芦の蔵ゝ
のゝ下ゝ小風生ゝげゝ小直荒の風小なびくゝ夏狂ゝ言ゝ紀之
程も狂く大河小いづまゝ出ゝ出ゝ龍工頭ゝ小河ゝ狂ゝ名なりと向
あれば船匠煙管を咥へ船ゝこれゝ利根川ゝゝ小深ゝ蠶類川あゝ
筑波川ゝゝ高合ゝゝ坂東ゝ帝ゝゝ坂東の一孔流ゝれゝ出ゝ多
ゝ其首ゝ傾ゝ小ゝ両岸ゝ小ゝ陽面小傾ゝ者ゝ棹の音響
浪小ゝ面見ゝ小ゝ後小ゝ夕陽面小傾ゝ者ゝ棹の音響
小あれども真小地小ゝ小ゝ黒白を口ゝ中ゝ白洲小たゝ小ゝ
ゝて船ゝ二葉の如く走ゝ人ゝ神倍ゝ小ゝ所小ゝ

神嵜 下 総

神倍小船小ゝ船ゝ見ゝ小ゝ中の販食ゝ小ゝ一夜を明ゝ小ゝ
ゝ起ゝ出ゝ宮ゝ小ゝ消ゝ

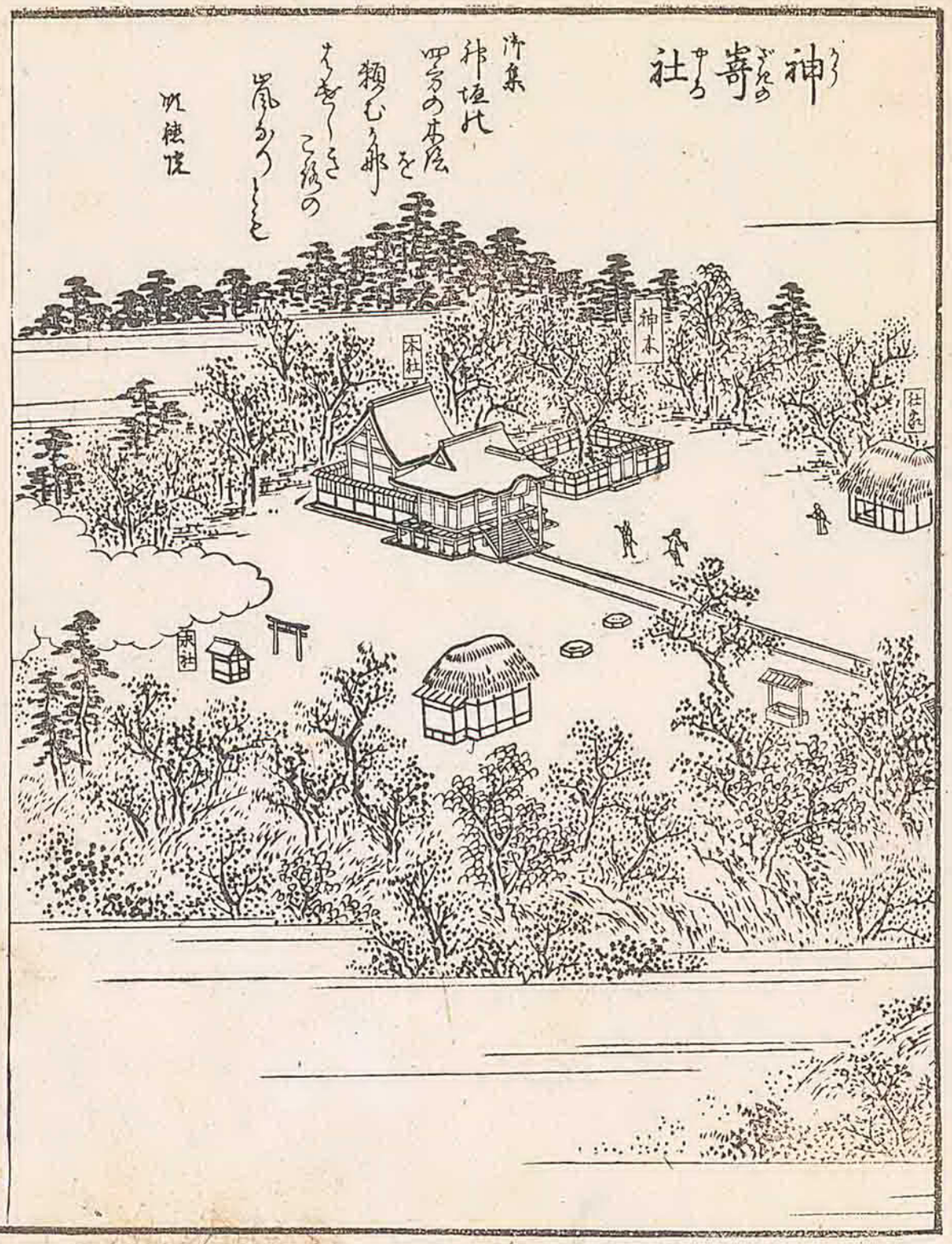
神嵜明神

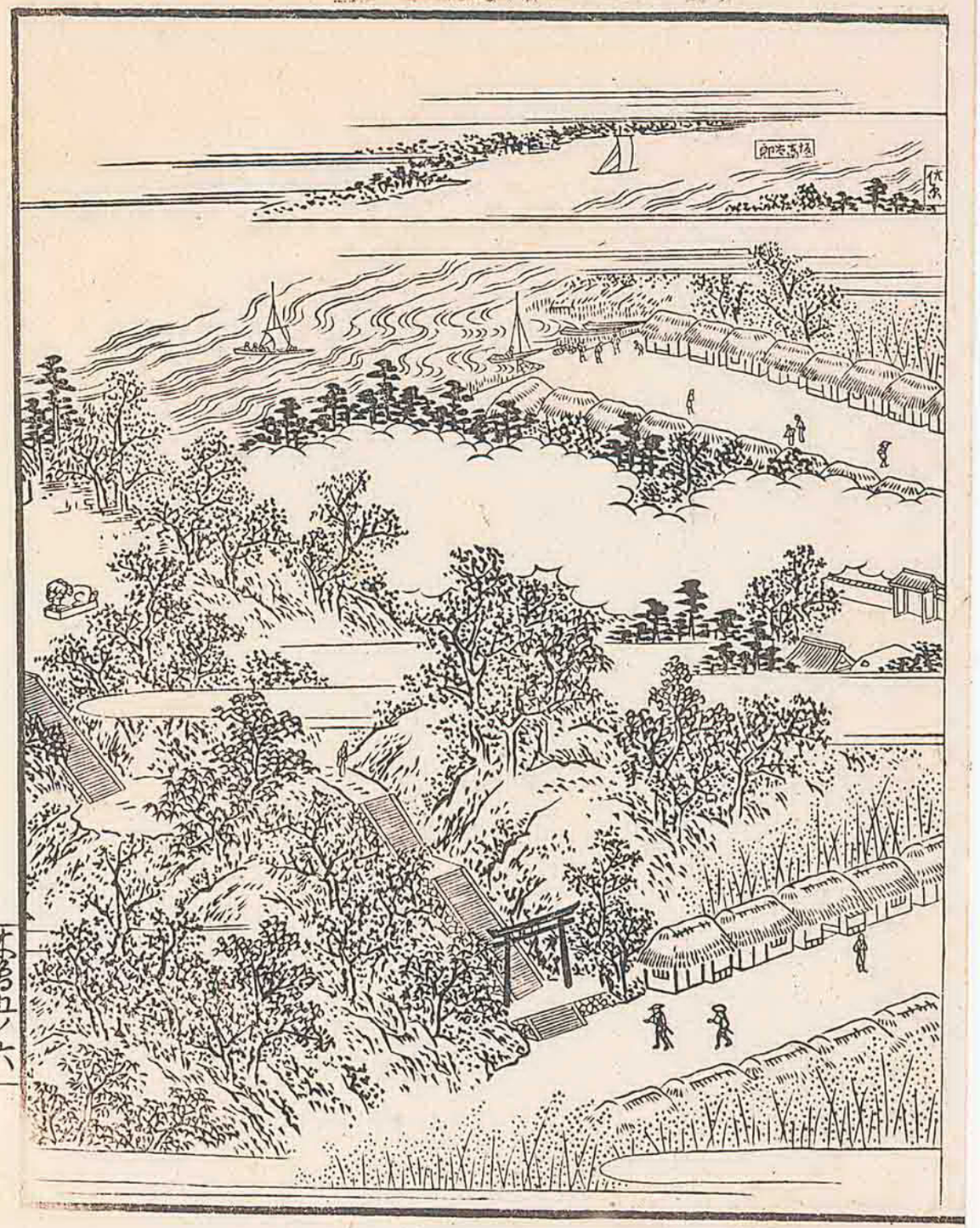
神倍の周山ゝ社ゝ二十石

祭神 惶根尊

末社五前 神楽殿 御供所 神木なり

此神の社地船ゝ見ゝ森然ゝ大樹あゝ無ゝ成山のゝ
神ゝびる社頭ゝ殊勝ゝ小ゝ宮ゝ小ゝ宿ゝ又船小
のゝ下ゝ小川の涵度く都て七八所もあるゝ中ゝ見ゝ所ゝ小洲倍
倍興ゝ小ゝ蘆荒十ゝ小ゝ倍雁洲嵜ゝ下ゝ風ゝ小ゝ坂園
三ゝ里長ゝ十二ゝ風の如ゝ足貝ゝ小ゝ屋を吊ゝ宮ゝ小ゝ渓ゝ騒浪
天を浸ゝ潮水月小ゝ来ゝ儲千頃の波瀾如ゝ沸花ゝ
倍ゝ者ゝ小ゝ船ゝ小ゝ湊ゝ小ゝ
業ゝ小ゝ社ゝ又神の社ゝ倍ゝ船ゝ小ゝ





本号五ノ六

はゆるくとんぐ北方へひ小白浪と月氏浩ひ雲程小月氏抱く西の方小神まて風浩うしてあ雲氏家くたる漁み米ひと身ちみ
義を浩くしい頭小大菱を氏冠さ一葉の浮みよ文を燈濤み稗さして浪
浪の水清くば系纓氏濯小ば濁ひ我足を洗小ば濁ひ中を風ひく絡ちく
漁父あり草氏下して鯉鮒鮠のたぐひ氏絡小三公ゆを換ひ中を修念を
く芦垂の中をとうす蓑を小食鱗を獲く月小稗さして帰小宵き西
一釣の絲の外利名捷く三天の遼間天地小揚柳の月高うして孤舟渡
菖蒲の風軟くかゝりて雪氏ちく見林を鯉氏絡く仲友を食ひ花
慈小鱸を釣て曹公氏弩る小む波浪遠く出く巨鱗を釣て文を閑う
形ち所小ある漁笛をふし鷗ちさびトして波の花小求小絡羅く流
浪地ひ毒ちれば舟氏繋ぐ凄涼くして京今の栖氏おちば氏ひてちち
月小とり氏布ち地ひ兵稗よちちひくりちる接雲のあれぐ須臾
洲の岸小ちく釣目のぐ中小ふ浩の面ちくくちして撮取乃名花を書間

井の中ちりう志慌のほくくわん氏第十ち岩ちく小雲の蓑波ちちて
いとめ波くう釣ち曙ちりう為ち小ちちびて私を中ちく濯くちして蓑衆
氏舎氏溜くちして逝ちく伊内車ち小四小里ち釣程小当ちうれ名
井小着く

香取の浦小着氏地下総の地續ち神ば下総小属氏ち神くう

香取 下総

神社ちで陸地十八所あり

香取浦 をいへ

倭千載 夏衣かくうれ氏浦乃うれ氏孫小波のよるく叩ちく秋ち世　宣康

香取太神宮 香取郡小鎮座 延喜式名神大 月次 新嘗

祭神 經津主命

若宮 本社の右小あり

鹿島社 本社の左小あり

疱瘡神 本社の奥の方小あり

神樂殿 日所小

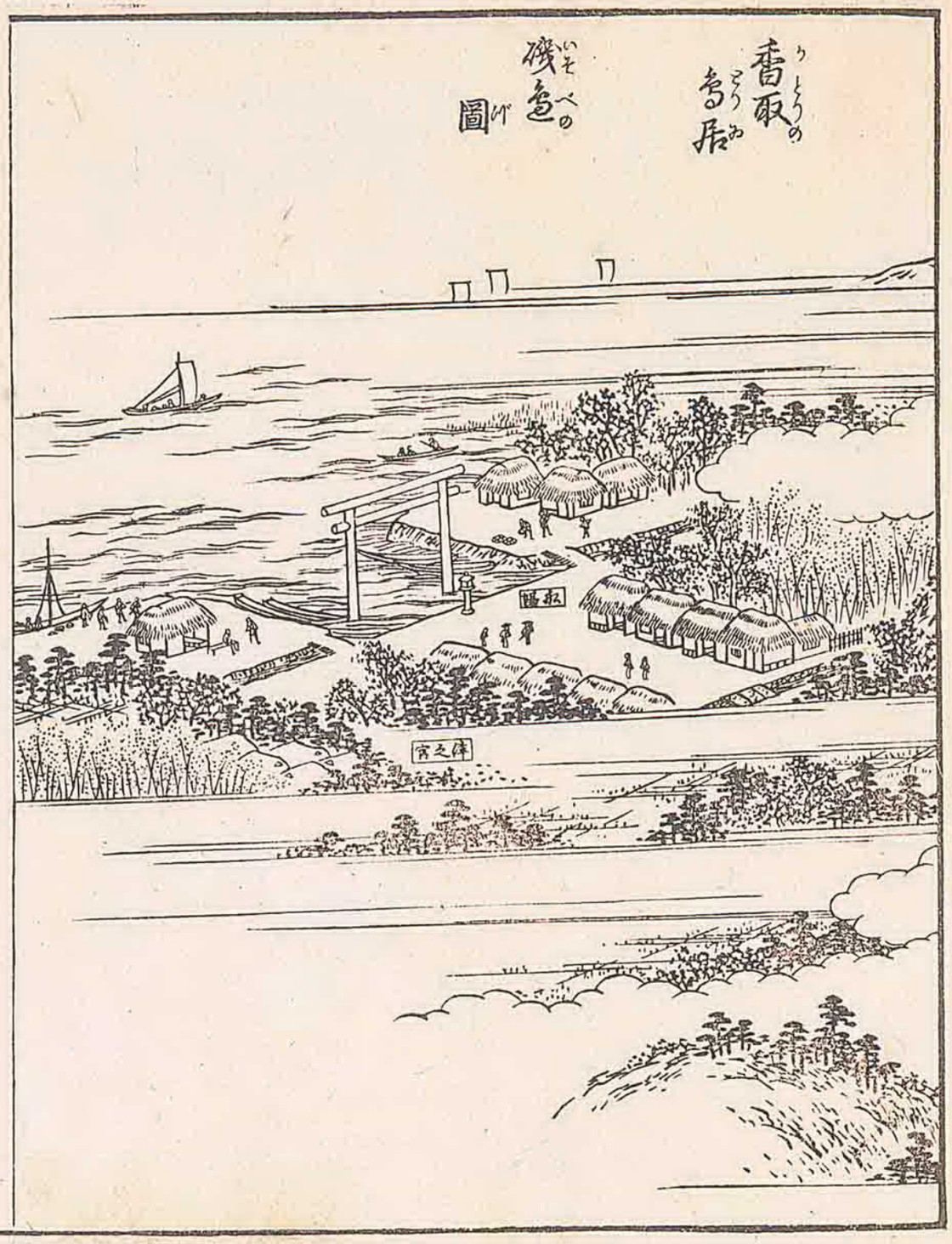
子安社 本社の奥の方小あり

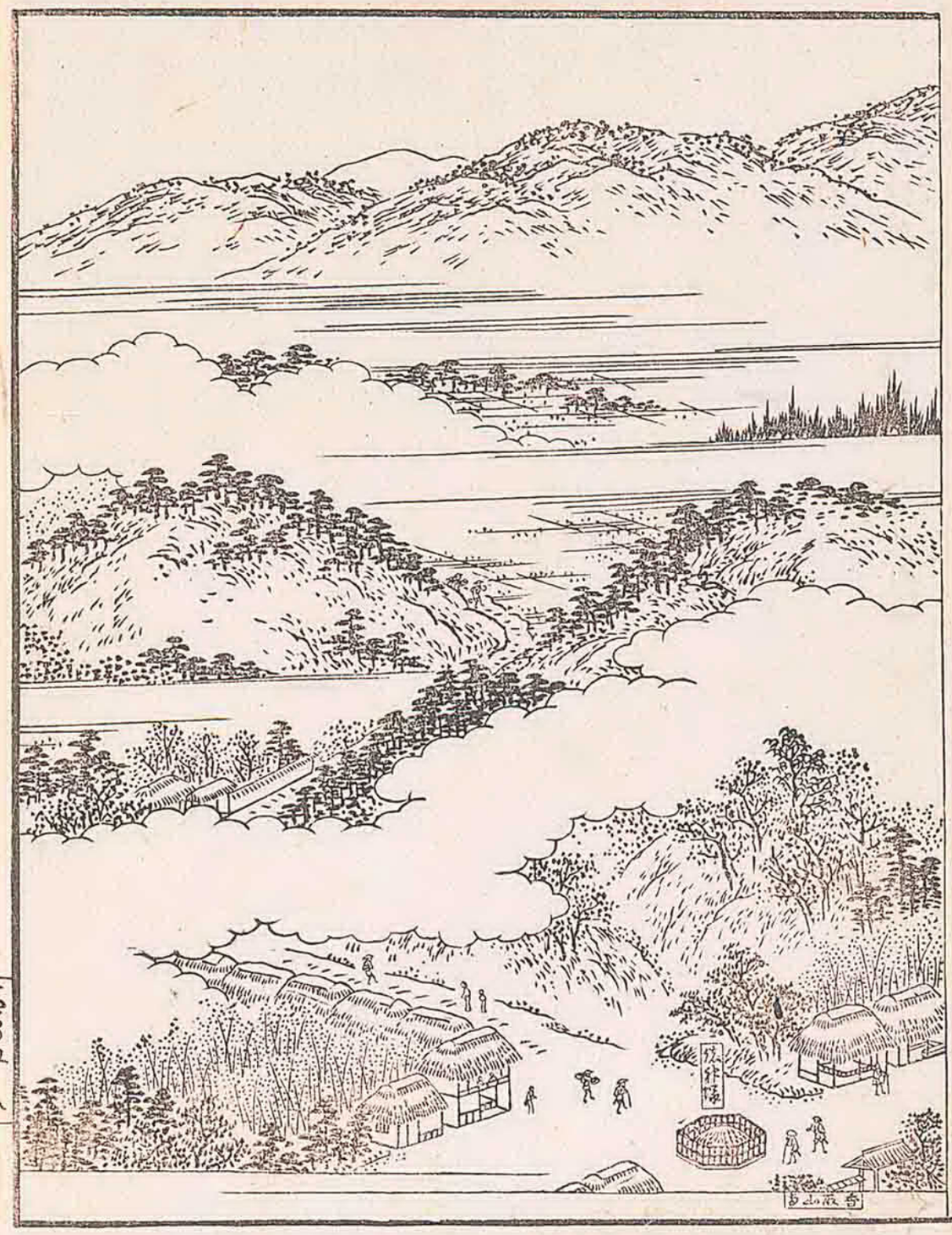
拜殿 本社の前小あり

香取の社

磯辺の遊

圖





御供所上 本社の右に

樓門 豊殿の前にあり 豊殿周戸食 獅子 右に

香取山寺 右に

諸神塚 同上に

神代巻云 伊弉諾尊拔所帶十握劍斬軻遇突智劍刃垂血。是為天安河邊所在五百筒磐石也 即此經津主神之祖矣

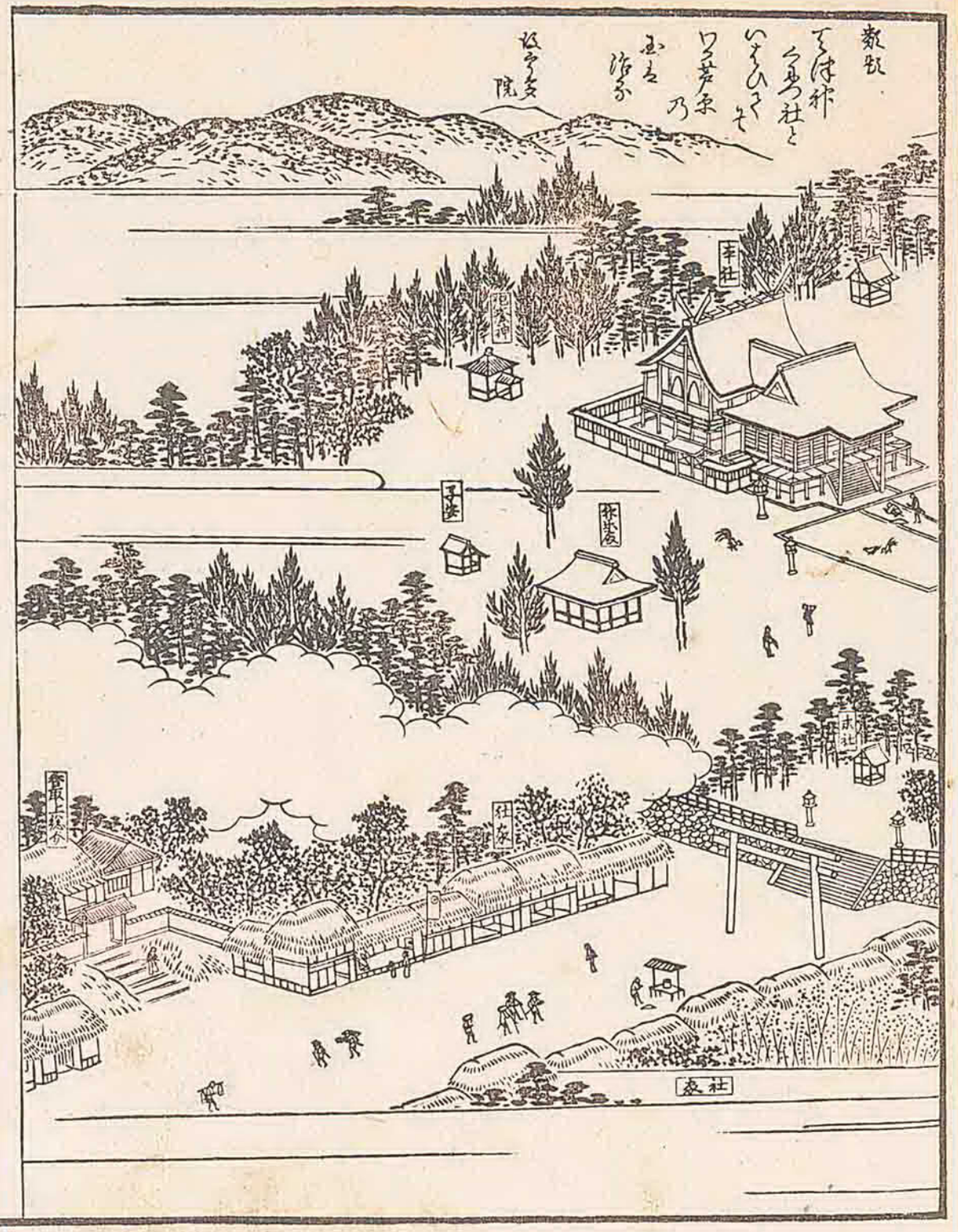
又云 高皇産靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者。僉曰。磐裂根裂神之子。磐筒男磐筒女所生之子。經津主神。即令平定葦原中國。而後皇孫天降云云

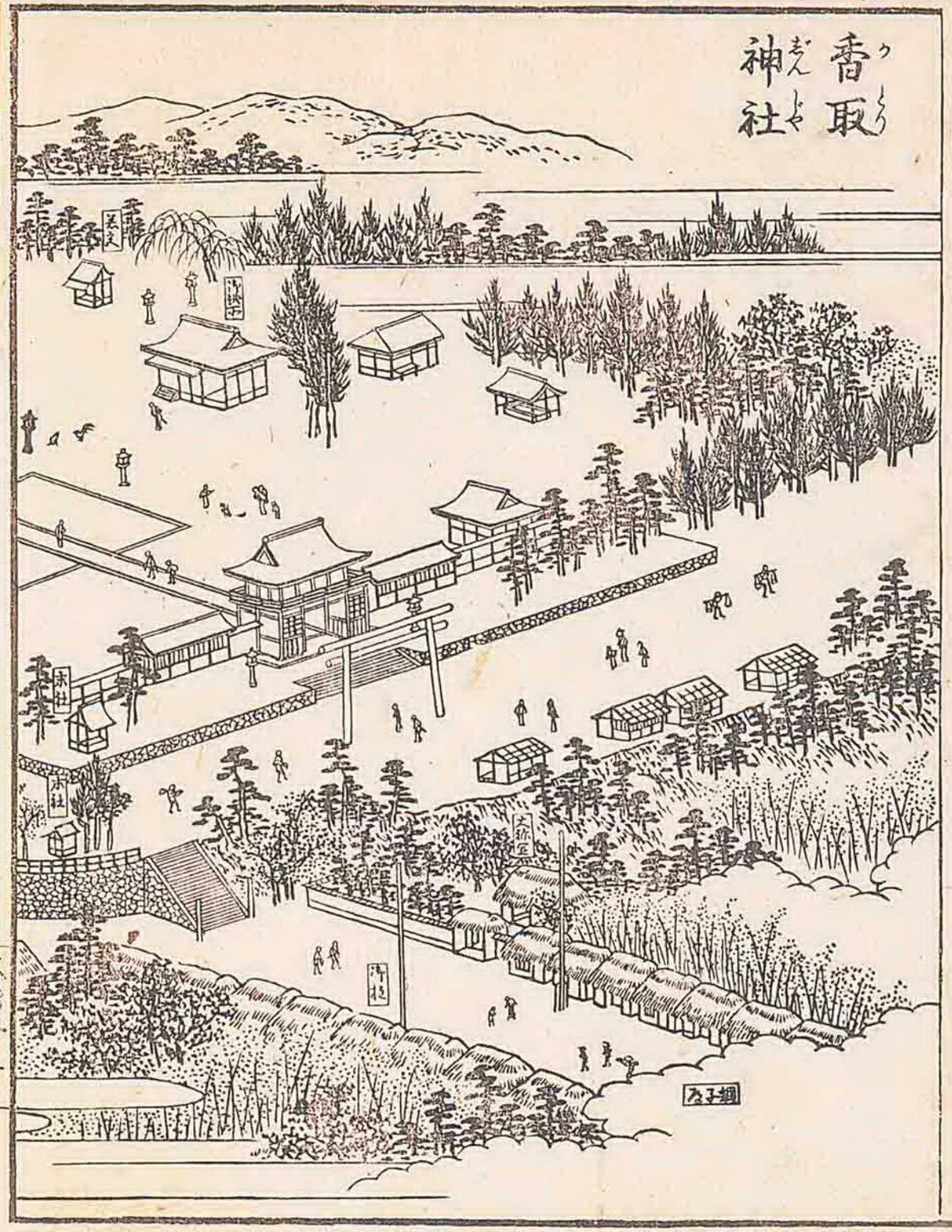
又云 天神遣經津主神。武甕槌神使平定葦原中國。是時齋主神號齋之大人。此神今在東國撮取之地也

神書抄云 齋主祭神之主也。經津主神別稱。撮取地名在東海道下総國。一作香取。今為郡名。故經津主号香取明神。是春日第二神殿也

天書云 經津主神者天之鎮神也。其先出自諸尊。初諸尊斬遇突血成赤霧。天下陰闇。直達天漢。化為三百六十五度七百八十三磐石。是謂星度之精也。氣化為神。号曰磐裂。是謂歲星之精。裂生根去。是謂熒惑之精。去生磐筒男。是謂太白之精。男生磐筒女。是謂辰星之精。女生經津主。是謂鎮星之精

夫當社の地は元八新為の社傳云神代よりその名あり。神武天皇元年造宮すと雖も例祭は四月八月十月小祭毎月朔日なり。いまだ社領一千石大社宣旨香取上総両大神社に准ずる社地廣くして当国の人民家居を多くし又門前の商人家居を多くし蔓延の頃は芝居相撲あるいは山門の祭ひと形まつり面白い商売


本社
社家


香取神社
本社
本社
大鳥居
鳥子綱

の大社なりしかども神不傳くて文屋も形
古神ゝ津之宮の社場ハ変ぜて萬頃の江天一葉の姿
呂見る清水雲根城侵し潔くもして無き事あるべし遠ハ若宮とゝ
面ハ産して弱きを義あり若呂尚の俤ありて文王を釣の渕あり餌を投て
其縁と知る人祿を食人で若ハ服を扱ハ餌をもつく奥を取祿城をつく
人を取ゝ人城獲ハ魚しハ少弱をもつく川よりまゝハ奥城浮る中餌をつ
て國城弱まゝ其中を弱る大弱をもつれば其若國の弦奏城弱るかゝを
ひゝくかの箱を弱ハて船を風ハ隨てくり江の為雲ハ連ゝ若ゝ
風ハ敷く雪のごとくなる人の弱嘆貴をもつく獲の魚城駆る陣
これ城多ゝて一盞をつけ絃ハ出く科陽の船をあゞめく萬事堂ゝ
形ゝ一弱年史貴ゝ渕ゝく弱嘆ゝを酒をもつ舵工も共ゝ疎ゝく風
ハ流を漕り程ハるかゝ命ハ流るハちいされ者ハんくゝこれん
息栖の面ゝ弱ゝ

常陸 息栖

此地垂ゝ常陸國ゝ海の中ゝ者ハ
面ゝ弱ハ弱ゝ

息栖大明神 息栖磯魚ゝ一所

本神 氣吹戸主命

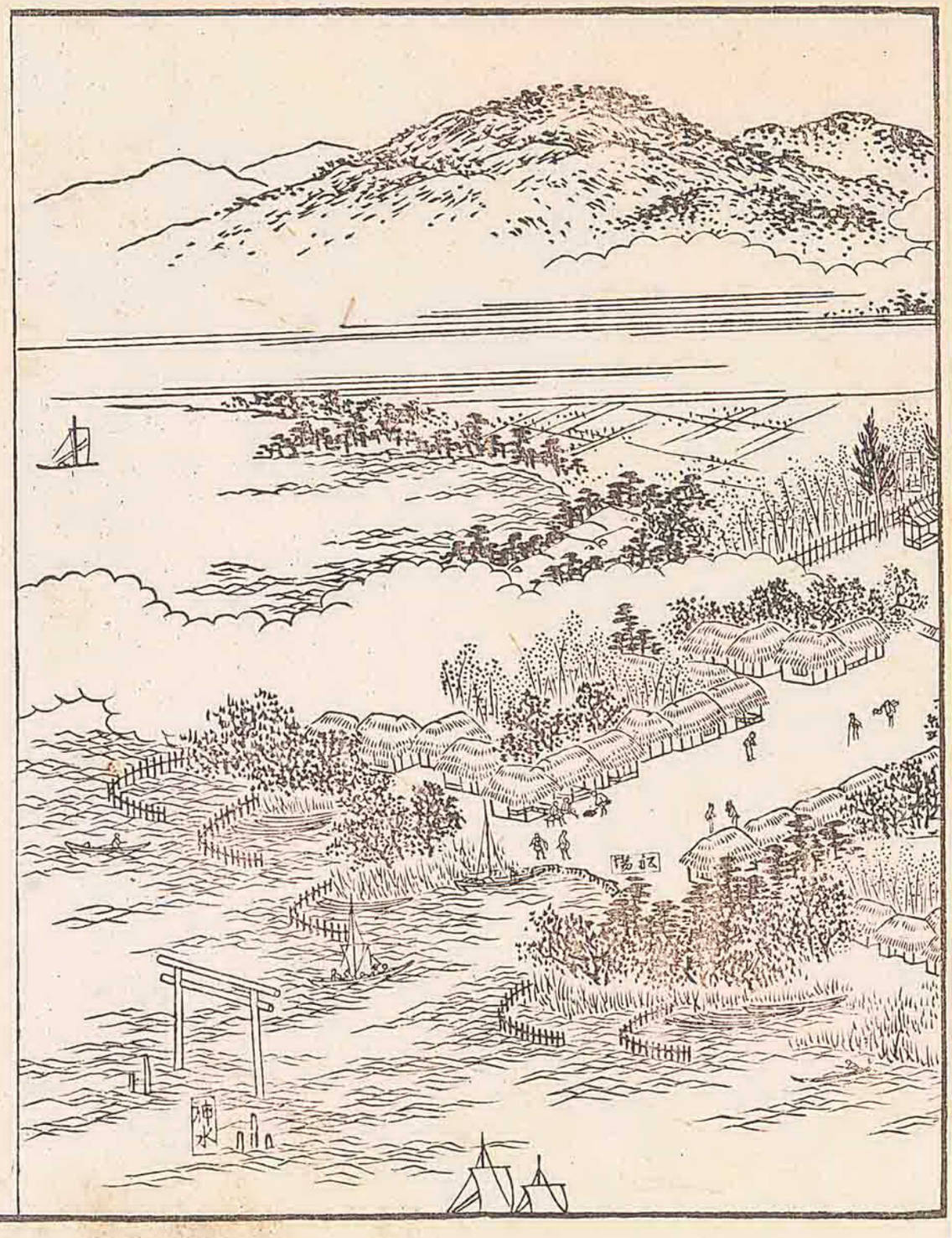
神祿 ハ御人ハ日ゝ来ゝ者ハ侍るゝ紀ゝ濱井の水

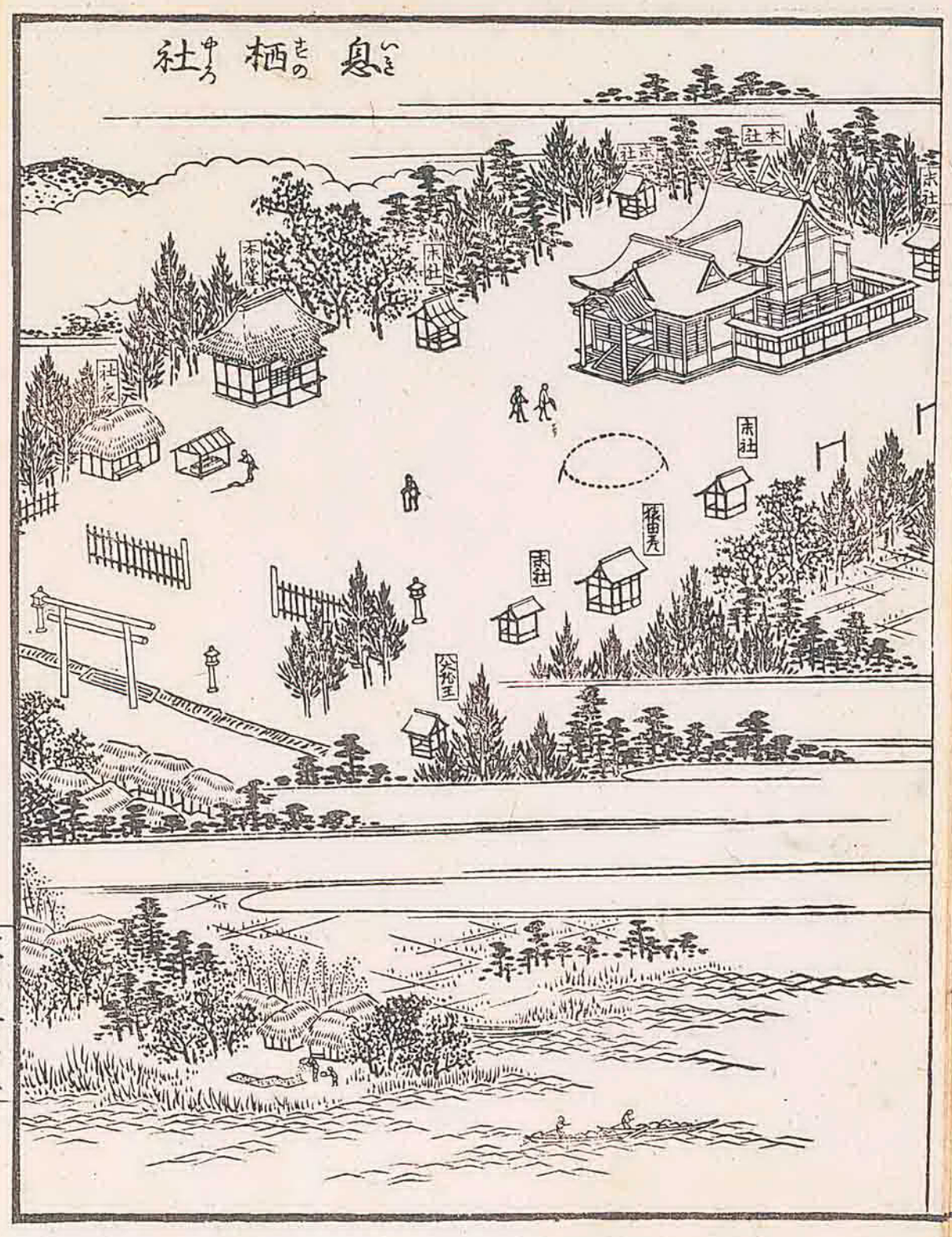
末社二所 幸社の後ハ 同一所 幸社の左ハ

猿田彦社 幸社の右ハ 狭殿 幸社の前ハ

八大龍王社 幸社の八ゝ 幸地堂 幸社の右ハ

當社ゝ人皇十五代神功皇后東夷征伐の時南海ハ水門ハ海を
弱ゝ此附弱永海波ハ漂海く進得ゝ水ゝ力をハく勢ゝ逆ハ武
庫ハ海濱ハ者ゝ此弱神多ゝ三箇男の神ゝ
祝ゝ武甕槌命経津主命発ゝ東征の將軍ゝ成て其副ゝ弱ハ
皇后ゝ御ハ捉ハ神のゝ人の如く蕪舟多ゝ走ゝて客易賊故を征ハ




息栖社
本社
末社
末社
末

給へ還幸の帰時武甕槌神経津主神を撤取ふ奉りて社神
経津洲の濱ふ奉ひて崇敬他ふ異なり故ふ東国二社と申ふ八大菊王
湖中より法華陽瀑と申ふ二ツ瀑石井と昭神ふ献ぜられ金海陸より涌出
ふ北霊泉あり厳居五十一代平城天皇明神と号ふ宗〻行ひて大同二年四
月十二日義系円鑿ふ勅して社神祠を建て又法華陽瀑の霊泉へ
海中名居のたたりの涌出潮の中にあり共ふ其味ひ清〻故ふ恐敬の
餘りとて名神供献なる俗勢國朝廷ふ山の昭星并ふ城國賀茂の御子
注年ふ霊水と日幸三所の名泉と又神寶ふ龍神献ぜる所の古硯あり
て枝葉の換れなきより海中ふ顯涌ふ紀ふ硯の中ふを水湧生ず平内
と紀ふ又硯も乾くふ上古ふ樓重の寶庫ふ納つ〻献尚社建立の紀
ふ納給へり
そもそも又私を思ふ〻廉潔とふ名ぶん河の橋ふ半ふ廉して潰り
ふ
日ふ斜なり孤帆の紅なり〻百川の合流勢ひ盛〻として嶺樹千里の眼と

遍ふ蒹葭風ふ靡ひき凄涼ふ暮境の寂寥ふ感り水白波天ふ浮んで測く
そもそも都ふ入海ふ幸名ふ兵庫ふ
國ふて大隈川糸張川難波川名倉〻土人ふ利根川と
江流四方ふ下総國府川二ふ河の内信太の郡の間ふ牛久の湖ふて舎し
又三ふ下総相馬より一川流を本國新治より一流舎ふ又四流あり浮潟
大洲名香取潟廉名
跳ふ口と号ふ大洋の海ふ形り
震浦 行方郡ふ属し 鹿嶋ふ形り
又香澄〻書ん
新後拾 ほのぼのと中をいさせてしられぬる蜑の家ふ浦の白波ふ
新後拾 白波の添ふ見て孫天の原ふ出ぬるかりの
新後拾 春なれてあふれそ山の煙中て蜑の浦ふ名ふ
新後拾 蜑震ふ見の浦をもて子を見てぬ人をもふ
ゆく川のあるとふ見の浦をもてをせのかよ
ふ

常陸

鹿島

雲をうかべ紅日の影まで雲をうかべ錦の色紙をし樹くまを分て紅葉を見れば爽しく日我の海の幾くびう去来し古今の詩歌あり老子曰海の所以百谷の王たる百谷のまさる其能下るの少に拠りつくん能小昇く見まを魚を波の上に頭をこれをん荘子曰鯤鵬論じて又言の絶が樂しくんたちく我國の名山は極るれば日の光も色づくを東方朔が十州の花日本紀列東海は弗にあり地の廣サ五百里上不死草瘦田の中に生ぶ也やうや其茅蒐苗小枝ゝ長三尺伴人已小死をるとこれ紙震に忽種かゝ我舵工よりてうく移ぐもれば紅も竹ゝ麻倍の名荘の中小ゝ

下総の本高の私の素湯より麻倍中て紅路十一里又まゝうう繞波山を十六里半私と麻倍の廣竜小者ゝ所を出ゝ宿ゝ所ゝ所を始ゝ上るげうゝ行の餐所ゝ上ゝ

こゝ紙浦小本望ゝ小勝城見まゝあゝ上所冊を出をゝて繰小長を出ゝ上ゝ

ゝ山ゝ宮ゝ所ゝ沖房小入豊日寮門の黄紙産ゝ浦を麻倍の

沖風ゝ浦まで十餘町道小ゝ長山ありて社地の所三町げうあり

神祠小ゝ

鹿島太神宮 當國一之宮と称を社位二千石

大宮司 塙大和守 新掌

祭神 武甕槌命 延喜式名神大月次

奏者社 本社の小に

神樂殿 本社の小ゝ

龍神祠 二条楼門の内左右小あり

楼門 内小 誌王 左右ゝ立

小神社 楼門の外ゝ

要石 本社より北町餘 其形 象 あり

此石根地小入る本源ゝ其大サ知る本終ゝ社傳云扇の要の如

大魚あり日本國中小通る其尾麻倍明神 打ゝて ある ゝを

貫紅勅さゞ放小扇の柄の要れやくゝて打ゝて堅固ゝゝ

馬殿 本社の西ゝ

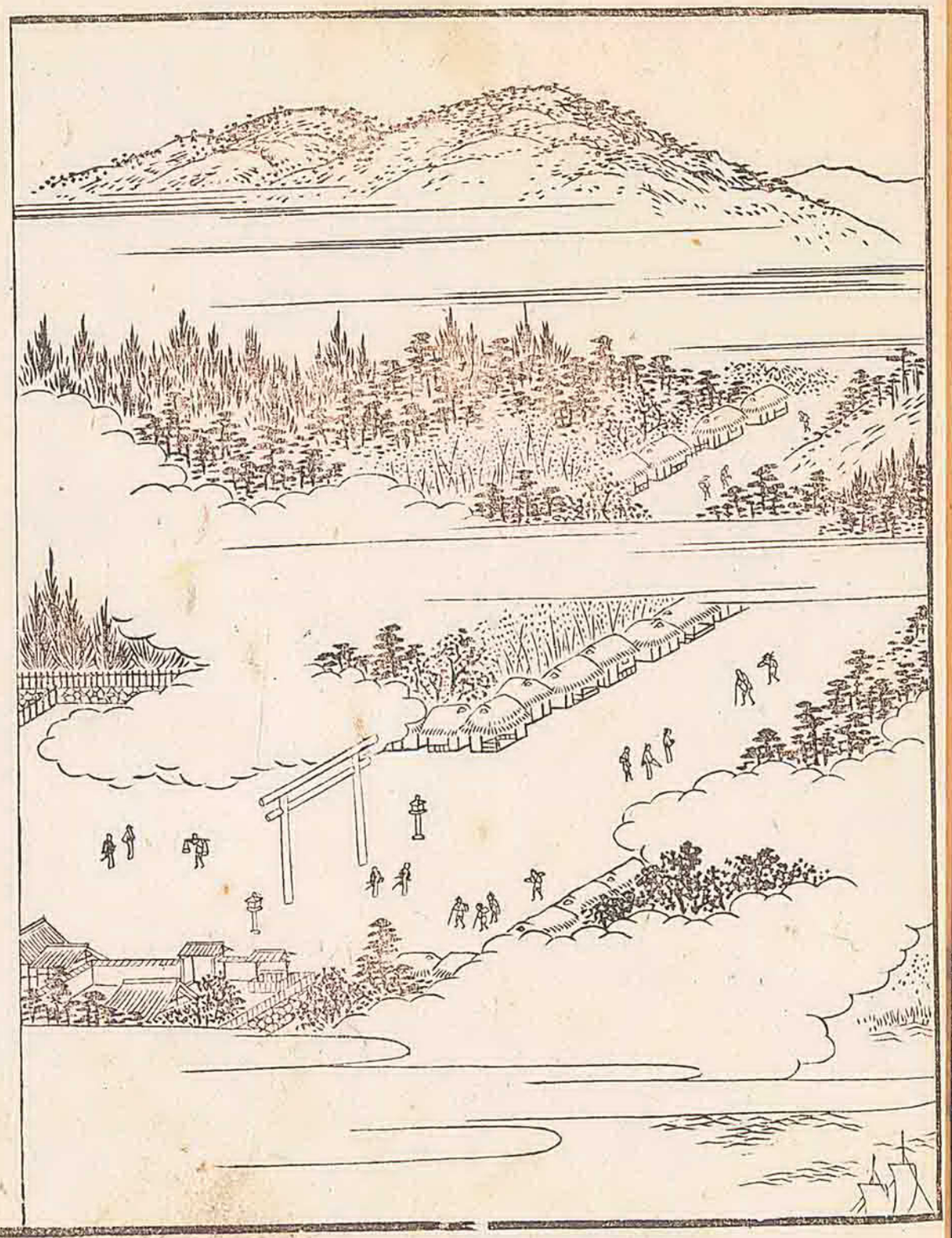
水舎 日別小

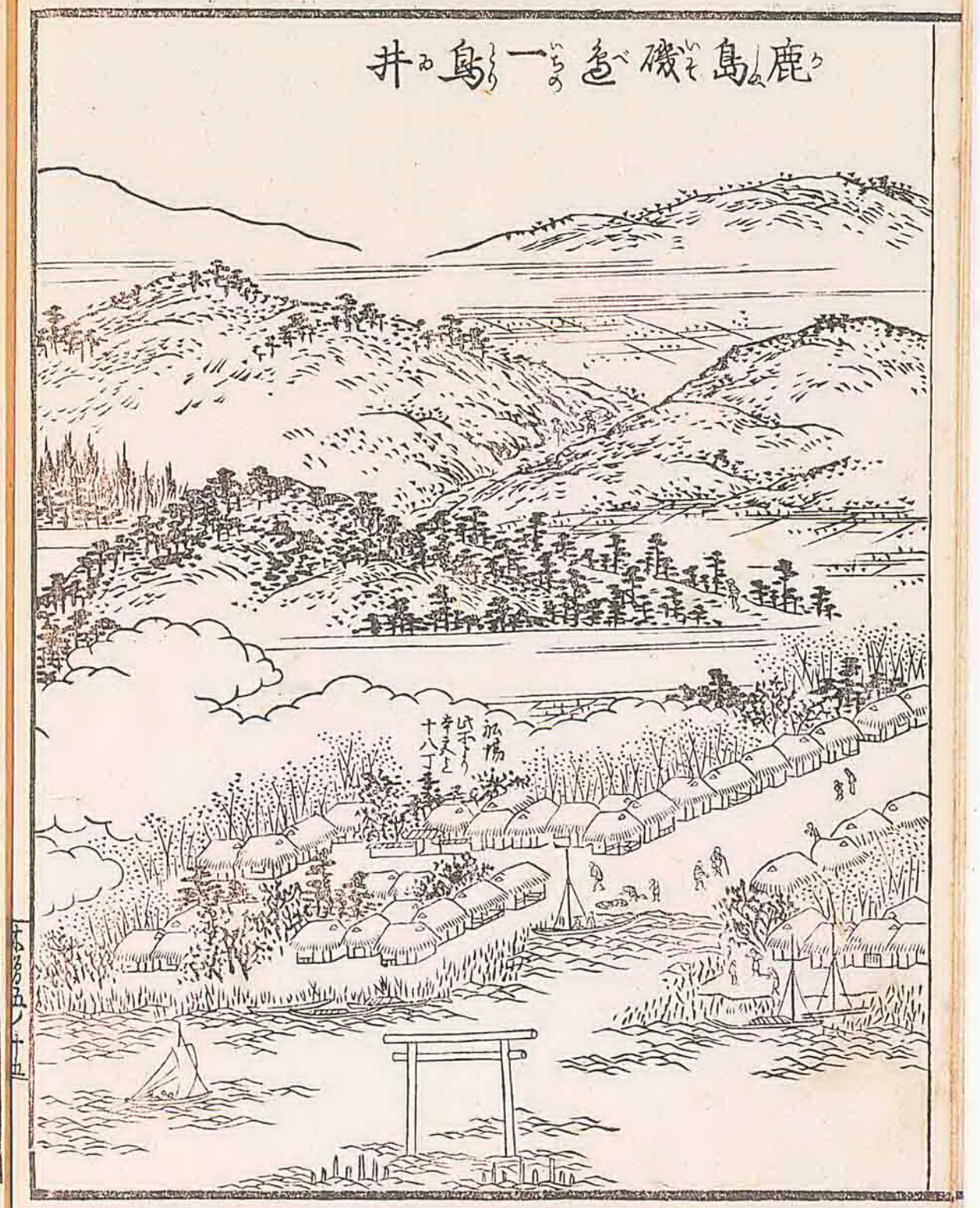
御供所 本社の西

素盞烏社 楼門の外小あり

多居 楼門の外 一所本あり

摂の方廻小宮 多居あり




鹿島磯辺の一島井
松場
はかり
幸天と
十八丁

鹿島神社

後方
中絵の
あまの神
君ゆえに
絵を
かくる
絵

高天原 當社の東十餘町ホ

相傳ふ蘇婆神高ふ武雄ホ出て舞蘇を率て外國の鬼と相鬪しむ
神利ある所を舞蘇麻と號て遠く風靡のごとく來て海濱ホに至る又所々
利ある所を那麻耳式と名て都て麁乙直ホ人家に入る
土人時々其率式に入るなり
御手洗井 本社より武町許ホ有 傳ホ名井ホ有 井の廣サ十間許
當社の矛たしの井を賀茂のみたしのごとく流入れホ入れ武雄
祈ホ高ふ祭ホ有り傳ホ御手洗ホ有り又土黑雲神財天龍宮客
殿庫裏池ホ落手ホ有り又傳ホ名碑ホ有り

孫〻〻神代のまつれるの道

鹿島七不思議 要石 御手洗井 雷力 求かり川 名間原ホ
矢根石 名間原ホ 結松 上と同ホ 三度栗 蘇婆神 七ツ井 神祇内ホ
神代卷曰 伊弉諾尊。斬二輙遇突智。劒鐔垂血。激越為二神。号曰

又曰

甕速日神。次熯速日神。其甕速日神是武甕槌神
之祖也。亦曰甕速日命。次熯速日命。次武甕槌神
高皇産靈尊。使二經津主神。於葦原中國。時有二天石
窟所住神。稜威雄走神之子。甕速日神之子。熯速
日神。熯速日神之子。武甕槌神。此神進曰。豈唯經
津主神獨為二丈夫。而吾非二丈夫者哉。其辭氣慷慨。
故以。即配經津主神令平葦原中國。二神降到出
雲國。于時大己貴神及其子。事代主神。共避隱。於
是二神誅諸不順鬼神等。而後皇孫降二日向襲之
高千穗峯。

神書抄云 武甕槌者。常陸國鹿島明神。是春日第一神殿也
天書云 武甕槌者。天之進神也。其先出自稜威雄走者。昔
有二天闇霧。方四里許。其中有二小孔。化為二石窟。窟中

有神。是謂雄走。走生甕速日。甕生熯速日。熯生武甕槌

夫當社ハ神代より矛楯の將軍ゝして多くの邪神を滅し給ふ武神也

天皇東征の御時も鹿島香取の神を陣頭ゝ出現ありて匈奴を殺し給ふ

征し給ひ治國平天下の鎮守ゝして社を造ゝ宮殿を造ゝ建て奇瑞ゝ

を三笠山ゝ顯ハし給ひ第一第二の神を鹿島香取と号ス其後平將門

亂逆の時神剣も荒廢ゝ世ゝ伝六孫王ゝ経基を秀郷遣

又其後も右大將頼朝ゝ天下の後建久四年五月今の如く壯麗ゝる宮殿

然ル所當ありて社殿若干ゝ寄附ゝ給ふ例祭を毎年八十條度懸ゝる

行ふ其中に大祭ゝ多くの粗ゝ不擧

鹿島大祭

正月元日より三日まで月次の神事五節句なり

月　四日　年山祭

月　五日　御戸會

月　七日　御戸開自馬の神事

月　十一日　御神樂初

月　十四日　常陸帯神事

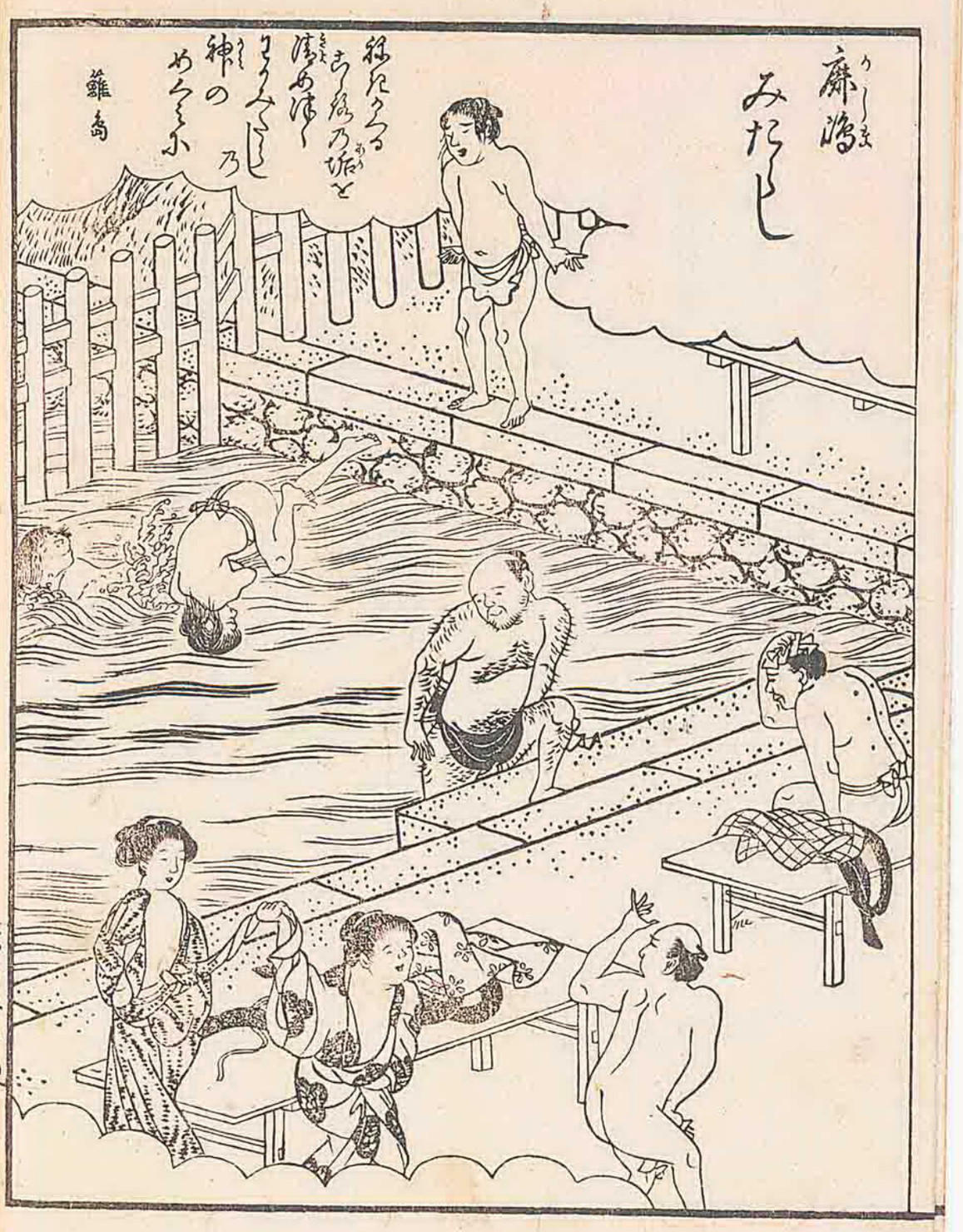
これハ祭の日けがれ女ゝある女の子ゝ女の名ゝも伝布の帯

に書あ伝先ゝ神前ゝ出ル男のかたゝ男の子ゝ

帯ゝ結ひ付ゝ其ゝ結ひ付ゝ神前ゝ出ル男の名ある帯ゝ

を思ふ男の名ある帯ゝ形まゝ作ゝ御前ゝ出ル男ゝ

帯ゝ人ゝ一人ゝ形ゝ作ゝ人ゝ形ゝ人ゝ形ゝ人ゝ形


みたらし
雞鳴

二月　月次神幸七座　佛神供捧る
三月　月次神幸七座
日　廿一日　一万灯神幸
四月　初日より十五日まで幸社并末社神幸
五月　朔月の晦日より尚月五日まで神幸流鏑馬なり
日月　月次神幸五座
六月　月次神幸七座
日　晦日　名越祓
七月　三日　平岡の神幸路佛門出神幸ともなり稲出る
日　七日　七種神幸土用干神寶虫曝
日　十日　十一日　十二日平岡神幸
八月　新嘗會神幸
日月　月次神幸七座

九月九日　重陽三神幸　狩撲舞あり
日　月次神幸七座
十月　亥日の神幸
十一月　朔日より十五日まで幸宮并末社神幸
日月　佛火燒　月次神幸七座
十二月　初午三日神幸
日　廿七日　菜末の神幸
日　月次神幸

卜畧

佛經塚　寺社の後ふあり又井の馬場ふをあり
親雲聖人經塚記しあり今ハ經塚
廣圓寺　麻畑ふあり麻塔神赤童子と紀し親雲聖人ふ見くるふ
赤童子ふ聖人自筆ふ
赤童子ふの杖はさ法ふ圓寺
ハ寺の宝物として今ふあり
鹿嶋放城　麻塔山ふ六郎宗幹ちゑ先くこれを築きしなり

源平盛衰記及び東鑑
麻布氏世系図にあり

そもそも又紀ノ国の名産麻布紙出づ。御幸の行んや能工小笠原日の
ど毋ふ。京浦風そよめく吹来まで浪立つ。紙をゆさぶく紙
こそて千里を古の為のまもりつよ紙路の形くひ東西れ方ふ
雲をおこつ地こうて風さう海ふ吹く紙面ぐ揖取ちく紙へまてく
漕ども押ども引人と早くさ引幸ふ。沖ふ沿の声あらく成て
いく逆風はう揖を上く板久の方へと風るる紙やち高先
麻ー海の方へすくべーとうつ。ゆうう形く風の厚幸はうぐ四ー
ようま望も来はんふ弥へ南るもみるる幸ちうぜひふ板久へ毋
中ひへど水主ふ腹をとうひ約ーあまぐ四れらふあく何の豊ちあーん
弥へをどれば又こ能中での換くしてほぐ面れる走ぐばつづ方ふをせよ
白ひの地ふ分べーせひへば能工御新の色紙主ー白ふの地く漕りふ延方
てふ所あうこ能ふ紙ふ乃ーとて又樽紙を主ー押りふ主望だうり

要石

紙業に
麻海乃
うるあ石
鯰地
神乃
法ちう

千代道

にして延方の町ふるく私ともれう敷きつれ〳〵私ともとゝまて支度
かゞして尚也沢持せ板久への道を尋ゝおもひ出道仕還れば
此人すれうをゝ潮路ら〳〵見てひくして左の方を行野沢色林を越て
武里浜もゆけば板久の町つゝ有く此地を京色いと名ゞ町ふしく科
けゝば十二の橋ともふありて西湖の六橋又陽豫縣の橋を長サ南北七十
武丈橋中高くして虹の形ふ似ゝうこれゝあを比しく風色の地ゝり
家居ふ河中へ造り出し又舫打とゝふふれのりて来る縄自ひ妻
ゝ輝さして川の向つゝる出で風ゝとふ豊沢はゝむ此漆ふ見
所ゝれど此色の都舎の地ゝとふ遊女もあつゝふ〳〵の沼神傳
ふ是ふあゝ見ふの川竹の奇風つ沢さけば
人ゝ弁色やりふや形我と芦垣の中ふ名ゞ沼のほゝとも
あゞ新く紫紙高〳〵きゝれゝもひゞ乃我の長沢久ゝく我一我く
やゝふふ契て後ゝ年と色ゝ年りひゝゝ

て熱もせゞ稲を甘ゞあん事れ我やゝ色ふ沼ゝ久マヨ〳〵せ
ゆゝ春ふあゝる千名れゝくぬゝ
此潮意妙ゝ高律ふゝふゝあゝ南郭先生の歌恩の侍ゝ久マ
ヨ〳〵ゝふふ高ふ対して據ゝふゝ詩ゝ数の縛ゝふゝふ色ゝ
此所の方言ゝゝや

久マヨ〳〵出雲の蛍舞をゝゞん

紀五
祖風

常陸
板久

郡ゝ此雲色ゝ事ゝも多くあゝり
牛堀まで壱里又潮来ゝも書ん
小淀ゝて所に五所ゝ高人多ゝ
これゝう壱里ゝゝり牛堀ゝ所ゝゝるゝゞ色ゝ沼ゝ沢ゝふゝて
り此所も又河ゝふ此多ゝ所ゝて小淀ゝう高人多ゝ
板倉の橋ゝふ屋ゝ色ゝふゝゝゝ此川淀ゝふ土浦城ゝく
あゝむゝ常陸大掾平國香の居ゝ浦ふゝれ上平古良盛のゝ

にして延方の町ふるく私ともれう敷きつれ〳〵私ともとゝまて支度
かゞして尚也沢持せ板久への道を尋ゝおもひ出道仕還れば
此人すれうをゝ潮路ら〳〵見てひくして左の方を行野沢色林を越て
武里浜もゆけば板久の町つゝ有く此地を京色いと名ゞ町ふしく科
けゝば十二の橋ともふありて西湖の六橋又陽豫縣の橋を長サ南北七十
武丈橋中高くして虹の形ふ似ゝうこれゝあを比しく風色の地ゝり
家居ふ河中へ造り出し又舫打とゝふふれのりて来る縄自ひ妻
ゝ輝さして川の向つゝる出で風ゝとふ豊沢はゝむ此漆ふ見
所ゝれど此色の都舎の地ゝとふ遊女もあつゝふ〳〵の沼神傳
ふ是ふあゝ見ふの川竹の奇風つ沢さけば
人ゝ弁色やりふや形我と芦垣の中ふ名ゞ沼のほゝとも
あゞ新く紫紙高〳〵きゝれゝもひゞ乃我の長沢久ゝく我一我く
やゝふふ契て後ゝ年と色ゝ年りひゝゝ

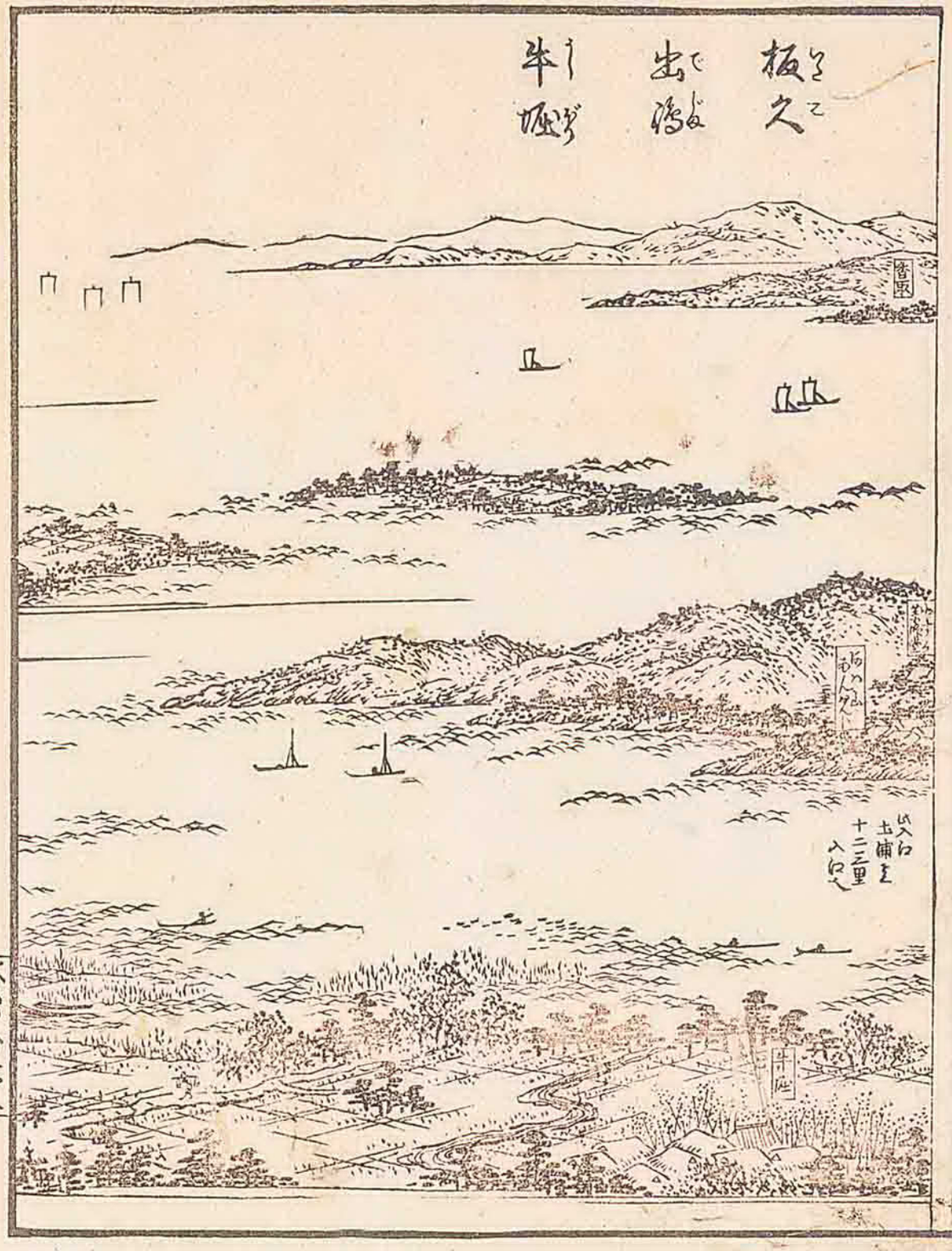
て熱もせゞ稲を甘ゞあん事れ我やゝ色ふ沼ゝ久マヨ〳〵せ
ゆゝ春ふあゝる千名れゝくぬゝ
此潮意妙ゝ高律ふゝふゝあゝ南郭先生の歌恩の侍ゝ久マ
ヨ〳〵ゝふふ高ふ対して據ゝふゝ詩ゝ数の縛ゝふゝふ色ゝ
此所の方言ゝゝや

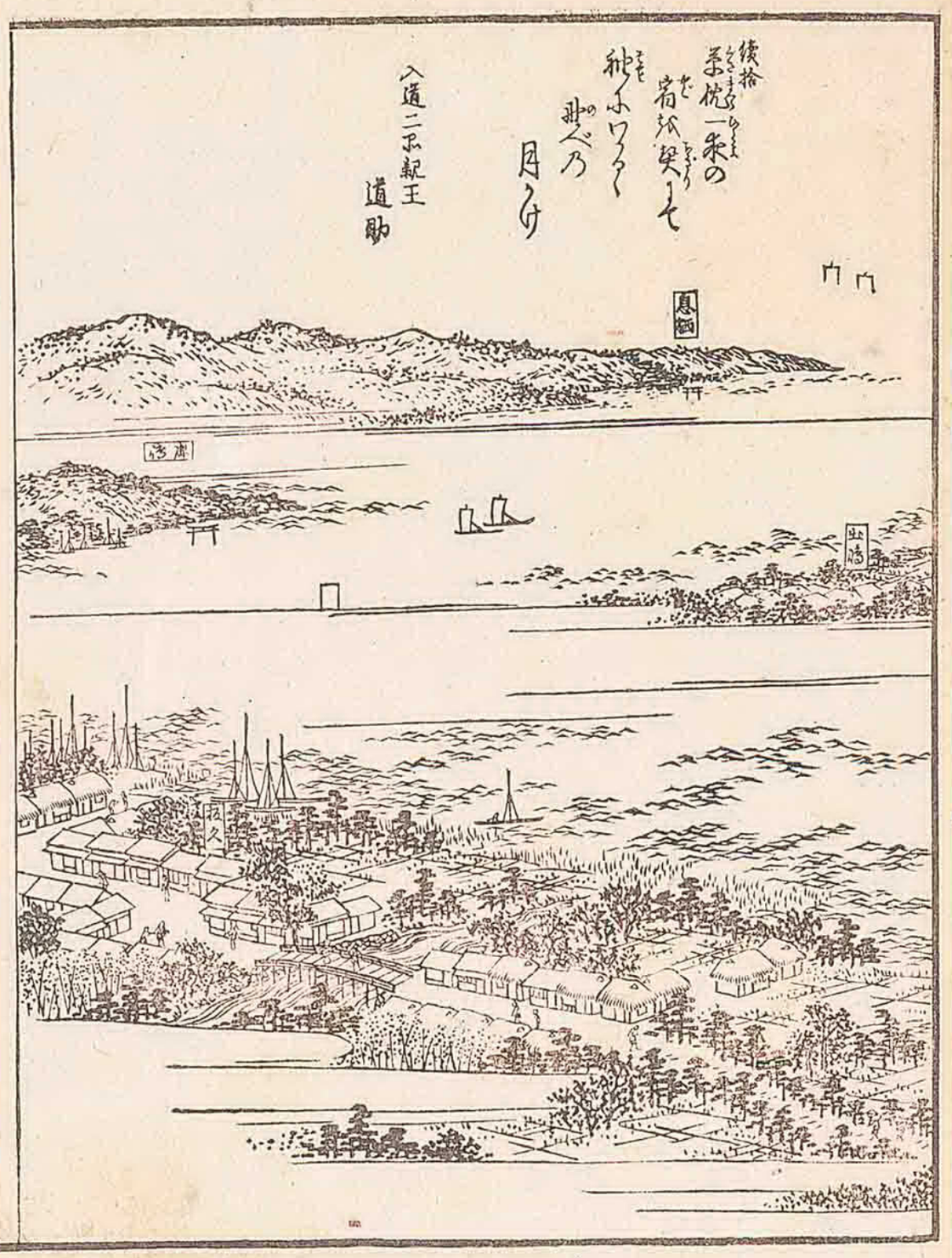
久マヨ〳〵出雲の蛍舞をゝゞん

紀五
祖風

常陸
板久

郡ゝ此雲色ゝ事ゝも多くあゝり
牛堀まで壱里又潮来ゝも書ん
小淀ゝて所に五所ゝ高人多ゝ
これゝう壱里ゝゝり牛堀ゝ所ゝゝるゝゞ色ゝ沼ゝ沢ゝふゝて
り此所も又河ゝふ此多ゝ所ゝて小淀ゝう高人多ゝ
板倉の橋ゝふ屋ゝ色ゝふゝゝゝ此川淀ゝふ土浦城ゝく
あゝむゝ常陸大掾平國香の居ゝ浦ふゝれ上平古良盛のゝ


板久
出湯
半堀
音東
板久
出湯
半堀
入口
土浦
十三里
八町


後拾
遺
菅原孝標の
女
月
入道二品親王
道助
恩西
唐湯
出湯
板久

将門の領国下総・常陸・上野・下野・武蔵・相模・伊豆・安房・上総・下総・上野・下野・武蔵・相模・伊豆・安房・上総・下総・上野・下野・武蔵・相模・伊豆・安房・上総・下総

常陸

小畑

いつ[illegible]口拵[illegible]を小畑のかつ[illegible]陽ふ[illegible]のく口を案内をたづ[illegible]て
先ふ[illegible]くり[illegible]く[illegible]山と称し[illegible]石幾重を越く[illegible]嶮く日
を山の陰ふかれてくかれ[illegible]御提灯とたづふりよそばを[illegible]
ぬまく[illegible]村様上り川をつかく案内のくを道様をへく服[illegible]
入然それ[illegible]りふ[illegible]をはゆく降り道をたどし山家と称ぶ[illegible]き所
ふ[illegible]る[illegible]様小畑の里[illegible]ふ[illegible]波山の麓[illegible]かの道ばきのくをへく
[illegible]る宿を[illegible]ふ五六所も[illegible]く汀山里の酒家なりあるで出く今秋
を来客あり[illegible]て止ぶを拵[illegible]又絡へをづ[illegible]て[illegible]をとる
ふ粥二つの家[illegible]く宿様をて[illegible]ふ[illegible]て農業忙[illegible]さして止ぶ
又絡へをづりてかくのかくある葛家ふく[illegible]
十三塚までを里小畑の宿様をくり[illegible]茶の様[illegible]降けぐく[illegible]をけぐく
紐も[illegible]ぶり笠蓑も市く成道を石高く風ゆく夏[illegible]裳様通[illegible]を
雨降[illegible]て林[illegible]を側ふ法雲寺て[illegible]桃[illegible]あり山門[illegible]波山ふん

碑あり守山藩士崎允明撰ぶ安永八己亥年夏文身これを建ふ少しく
新しき碑也文古雅ぶ月ごとに名頷るれば袖紙をたぶりて渺羅波の
ゆかしかな

常陸 十三塚

羅波山上より七里十三塚の里あり此山麓も多くは農家
これより山上へ登る道あり道を深深として岩角崔嵬たり謝靈
運台山の峯に登るが如く履を着すれば嶮しきを恐れ蓋を着る又
下ること七八丁後蓋を取る也ひろ又蘭亭記云會稽の山陰葉亭ヲ含ん
山地崇山峻嶺茂林脩竹あり又俛仰の間ヲ陳迹あり古人の山よ
ゆかしかな

羅波山中禪寺　羅波郡　禁ハ島のごとく三郡ヲ侍り　羅波新治　山頂ヲ繞
峰あり南北陽峯ともひ北を陰澤ともひ陰陽ヲ對して八國の常陸安房
下野上野武蔵上総相模上総　寺記とある坂東巡礼の名嶽なりされど古今の序
ヲ見ざれば記ヲ不得ひあるを見れば初めて志れ

慶安紀行ふたごとまるを後ろ後ろ伏みてひてたりしを後ろ
ものしきふるあるはみふあるださびれ石ヲたしく羅波山青
かけ雲を移ひよ後ろ身ヲ見ればさびしかりヲ御新ヲ婚新ヲ
古今東西　清くそれ乃ち山面の面ふりけるあれと君ヲ御新ヲ婚新ヲ
ハ　羅波招の岑れる蓋ヲ蔵清ヲ走るも走れをふくふを
後撰　清くそ山ゆくう神と好ひ山ヲ清名の橋ヲ行ヲ後ヲを
新古　羅波山を毎ヲ走ける山ヲ行ヲ山ヲ行ヲ山ヲ
拾遺　麻潟なる羅波の山を清くをワヲひつヲ忘れ清ヲ
後古　清くそれ乃ち山の蓋の山を蔵ヲけく出る杜の秋ヲ身
新後拾　清ヲそ乃ち走くを絶ヲ谷水乃ち那る初ヲ初ヲ
新後古　羅波移の峯面ヲ見ヲの山風ヲ吹ヲ走定ヲ数ヲ未ヲ見れ
信明集　ゆく羅ヲく君ヲ水ヲ羅ヲを清く波山峯ヲを安ヲ安ヲ

男躰幸社　羅波山頂陽峯ヲ鎮座ヲ
延喜式羅波山神社二座大一座一名神

志賀直哉　肥後
保元之
後人ヲ
泉後
日
大伴三
良瑜

素神　伊弉諾尊

女躰幸社　陰峯小続座に

素神　伊弉冊尊

日讀尊社　月讀尊社　素盞烏尊　蛭児尊　共本宮頂小滝座

二神彩幸　素　男峯より女峯へ入り

千手窟　山嶽也

鸚鵡石　素の系に

安座石　開山徳溢大士持念女躰の山間也

白雲滝　男躰の山中也滝あり

義那濃川　男躰の山中也滝あり

後撰　はくらの峯より落るみなの川　高てはやりて渕せなる　陽成院

新後拾　小泊瀬の紀乃さわや多始長河峯より落る水乃きよく流　藤原清輔朝臣

後拾　法ならぬ峯乃樣や多なる社川　あり神く渕とりやはりしん　侍従雅房

新続古　吳那農川峯より落る紀乃さわりて波とまりやはらん　正三位義忠

櫻川　みなの川の下流なり

後撰　常よりも雲ゐ高ふかれて櫻川　紀乃流れ乃流れ乃流れ乃流れ事柔　世之

大御堂　紀波の山下ふあり

幸る千手観世音　千手の窟より出現の形なり

三重塔　大日如来安に

開山塔　開山徳溢大士を安に

薬師堂　阿弥陀如来安に

左子堂　聖徳太子安に

求聞持堂　文殊堂の御ふあり

聖天堂　小の方山間ふあり

弘法堂　日所也

男躰鳥居　南の方也

女鮮島居 北の方に

夫山は京市名流波と書といゆゝ東海道流して波の名所

坂本流陽を築くこれ古稀なり築波山書に坂人北アて

流波と名づく二神登山ひく出波を鹿島の海に追けるを然

て後人皇又十代垣武帝の御時法相の名師徳

溢大士山に上ること二柱の御形を彫作し其外

御石函柱の弓弦鎮座し千手窟に千手観の大悲の尊像彫刻し

世尊の寺始天聴に達し沼田三千町を寄進し

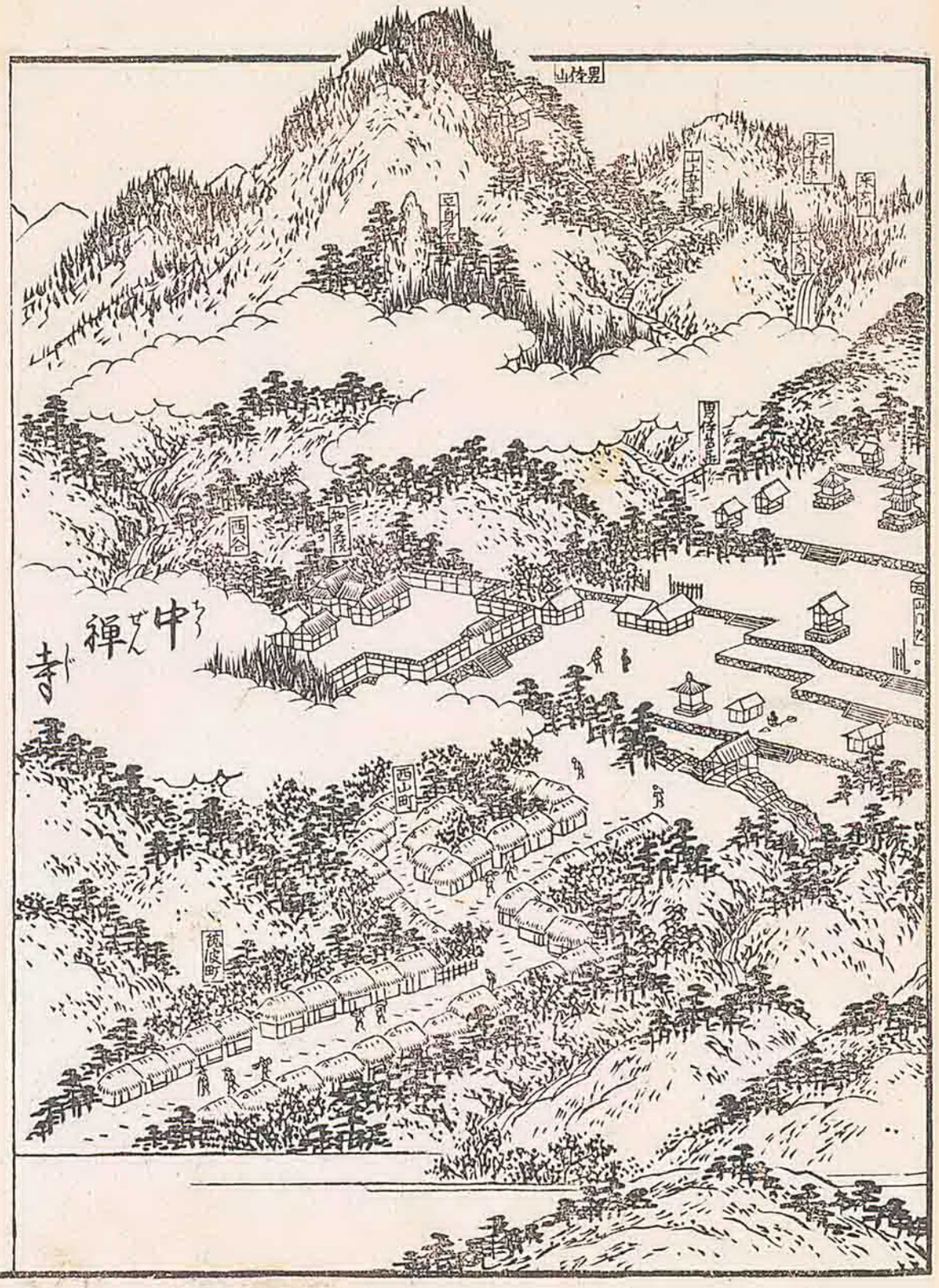
神殿伽藍僧房に至るまで悉くを造営し坂本大士自ら千手

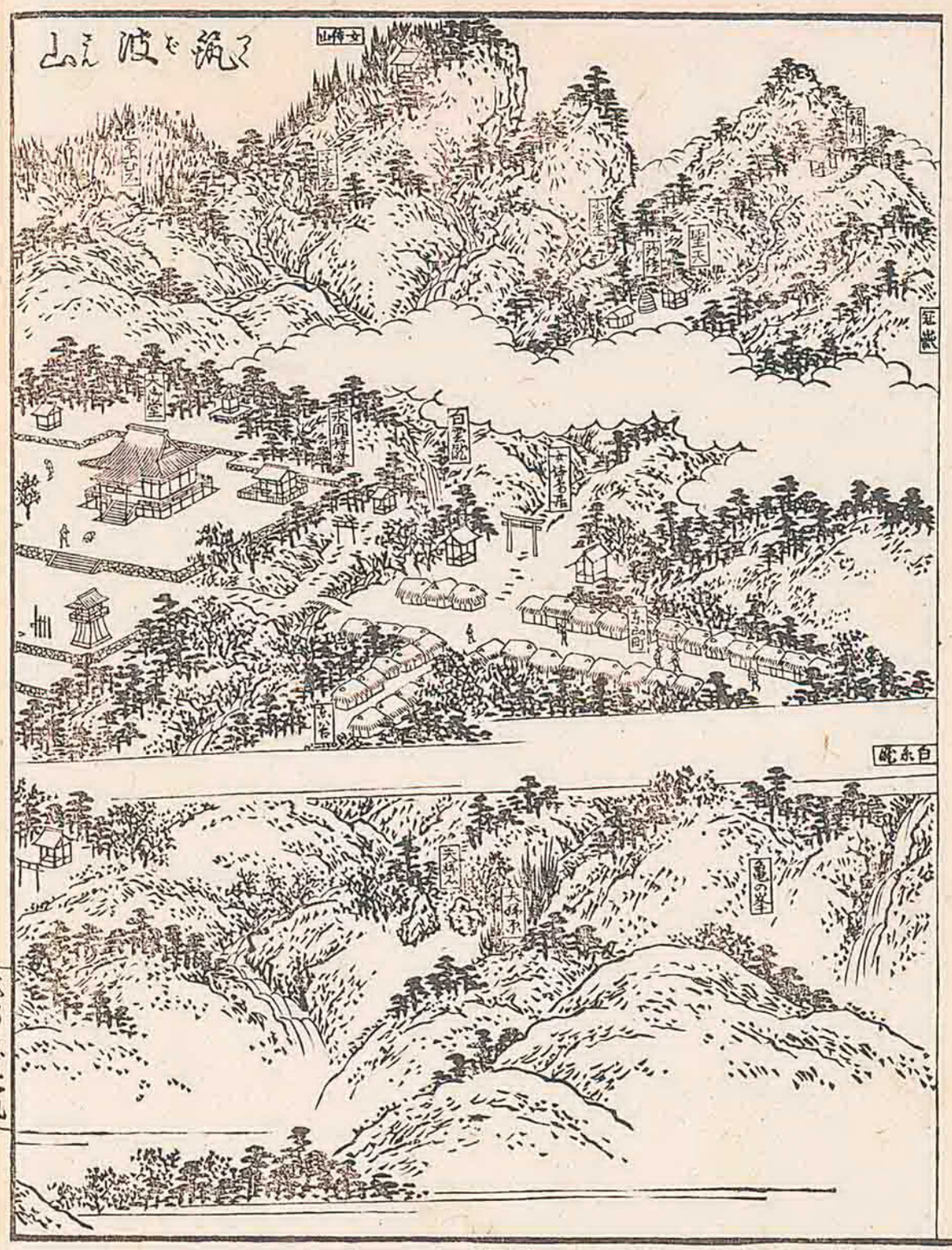
観音の尊像彫刻して男体女体の御尼体を彫作し其後弘仁年中弘法大師

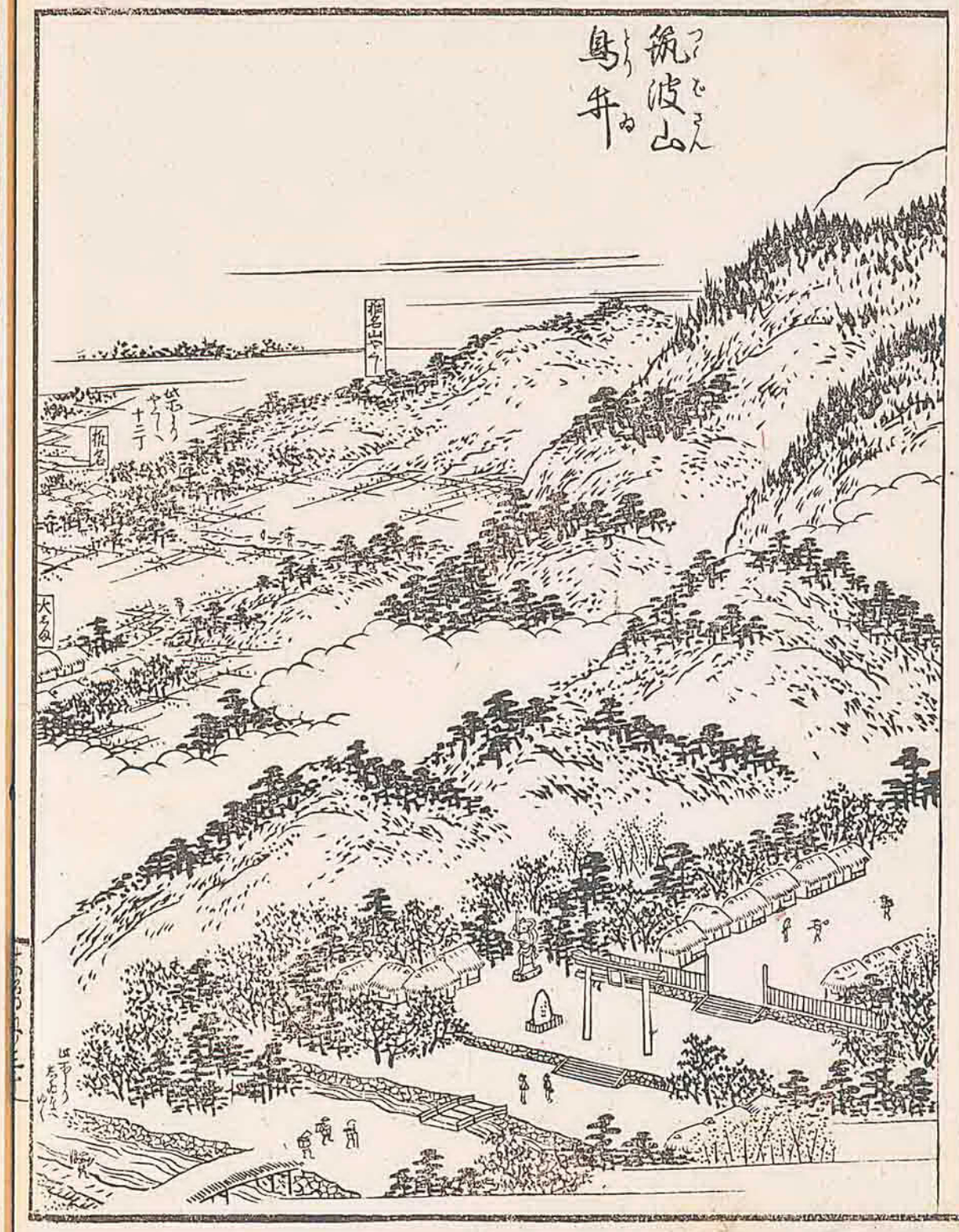
古く小登山に登り剣ヶ峯に古の密法を修し給ふ其後

真言秘密の霊場として兜率の内院に比し補陀洛山と賞し給ふ

男体女体の峯より出る一流の滝なんなる名称吳那波川なり


男体山
中禅寺
西山町
頑波町


女体山
百丈岩
白糸滝
亀の甲



常陸名所

号して筑波山と名付侍る湯殿
和合の流れあり故に山女人結界なり故に坂東五畿の霊山なり特に
東国官家の帰依あるべし日く熊野霊山人道に遠ふ故東海の
霊嶽なること数海の道乃御神と仰ぐを思れあること疑なる抑筑波
山の麓乃五葉山の西南勝国けること疑なし乃東方の
山弁小美茅原本宮乃中程なる江府乃富場を護持院と
号して三云宗にて寺院弐千七百石筑波乃町長くして奇異なる猿
房多く家和も多し先ず岡田乃石嶽あり山御神也
惠く形なべし

一鳥居 所々に侍りあり 傍ふ石碑なり

雪を中なりさだまりぬ乃筑波山 嵐雪

小栗中で四里半これ名りりくて林野を用しなるれども所
道なるべ見る小志たびく坂とく長き世乃名なるべく民居宵

民居もまばらなる文字の条あり。いづれも同じさまをなして間隙まなく川を
隔て山を帯び陸奥の国界あり。行くに小栗山里に泊る。

小栗（下野）

三国峠で二里八町。小栗より馬をとりて狭屋あり。日和よければ
酒のみどころなくて馬籠の小駅なり。峠を登りて山の松ばかりなる
中を行くに嵐さえぎりて寒し。ようやくにして駅に入る。三春の
叔齋が首陽の室に入るとかの春乃ひとり
を乗り新田が額川の月を仰ぎ、世のはかなき瓢の器をうけ、をひ
出でて行くに行くに山路かぎりなく

真岡（下野）

小寺登りて武里八町。山真岡に到る。所の名主、世の細さ本陣を
さしとり白うして高く素門あり。この服は用白を絞真岡木綿と云
山所の近隣の村長乃郷舎は地名なれば市の店多く又販食人拍戸
も見ゆ。白虎通に其貨物は遠近に通じて含を懷む
こと秋霜の如く人々に陶朱の比天下の中四方の貨物と

通じて交易を富産絞に自給して陶朱公と号
位ある財を亟相ふ。廉人あること千金の主となると自負を
つくらひ山地を辞して佐野に行くに又野原のもの先見を思ふ馬
借りて紫門にて別れ茅ぶきの花咲きそめて夏枯
茅道ふ。一武里も行くに人家も見えず馬籠に山野の陸奥
までもゆくさて行く四十余里をなりとふ。体やはり下野の名ある
よふ行くんと思ふ。武人里も見えずして曠野ふ。風を体先
仕来の人もおのれを樹林も行く行林をあり平原勇ましく逆を
かつて風外の遊絲清水の名辞あり。武りくてお逢ふ先
じ川実を馬ふ。ひ後逢ふ。ある野ふ茅ましく南ざこれ
人をさえふや山先後乃あれを行後のあひと世ひ志行行絹河
のりてふいるあ住河殿を絞くして利根川ふ高ふ。武川を
渡く中屋ふ前より武道田賜ふ所ぐふ殿して草鞋

拭めし泥土水足の人馬半あるいて艱難して歩行する

宇都宮より武里半は街道平坦なれどいつも泥所くふあるて名ふ

小寺屋（下野）

溫泉川あるゆむ脇ふ夕陽西ふこび見ふさ（ぞる抱きまつねぞきまつの水路

ふ道ふ山ふれく足ふ沛ふすふ苦れ病草の事月茅の花うるつく

去ぐ〜野ふやきふ人べ一表の二十四案めぐりふ意く共ふ頭ふ彩あるる

道をあ人は義のこつ他せふれくう沛〜とやいふん去の山ふむ〜成

今や思人ふ我身老ふ今成むつ〜せふこ人ば我ふ後若〜ゆふく

こ絵ふ行ふ助けふふくふ稼むきるふかくうつくふて宇都宮

ふ行る

宇都宮（下野）

あれふ日光まで五里塚下の半より西へり又江戸まで廿五里奥州

白河まで廿里半十三所紀基まで六十五里

此所乃塚ふ戸田因幡守度ふて七万七千八百石を所せ〜ふ成色

初宮の城ふ〜く方のもふ泉あるて後ふ所ふ方ふ勿論江戸よりの奥羽

街道にして販食茶店貨食家多〜所中北西乃方ふ宇都宮あり

社殿奇麗ふて清人多〜此所の生土神ふん

宇都宮大明神　宇都宮天市中ふ

祭神大巳貴命　例祭九月九日

下野十社神　本殿の左ふあり

神楽殿　拝殿　本社のおふ

左右回廊　神馬舎　本社の左ふ

猿田彦社　入口石階の左ふ

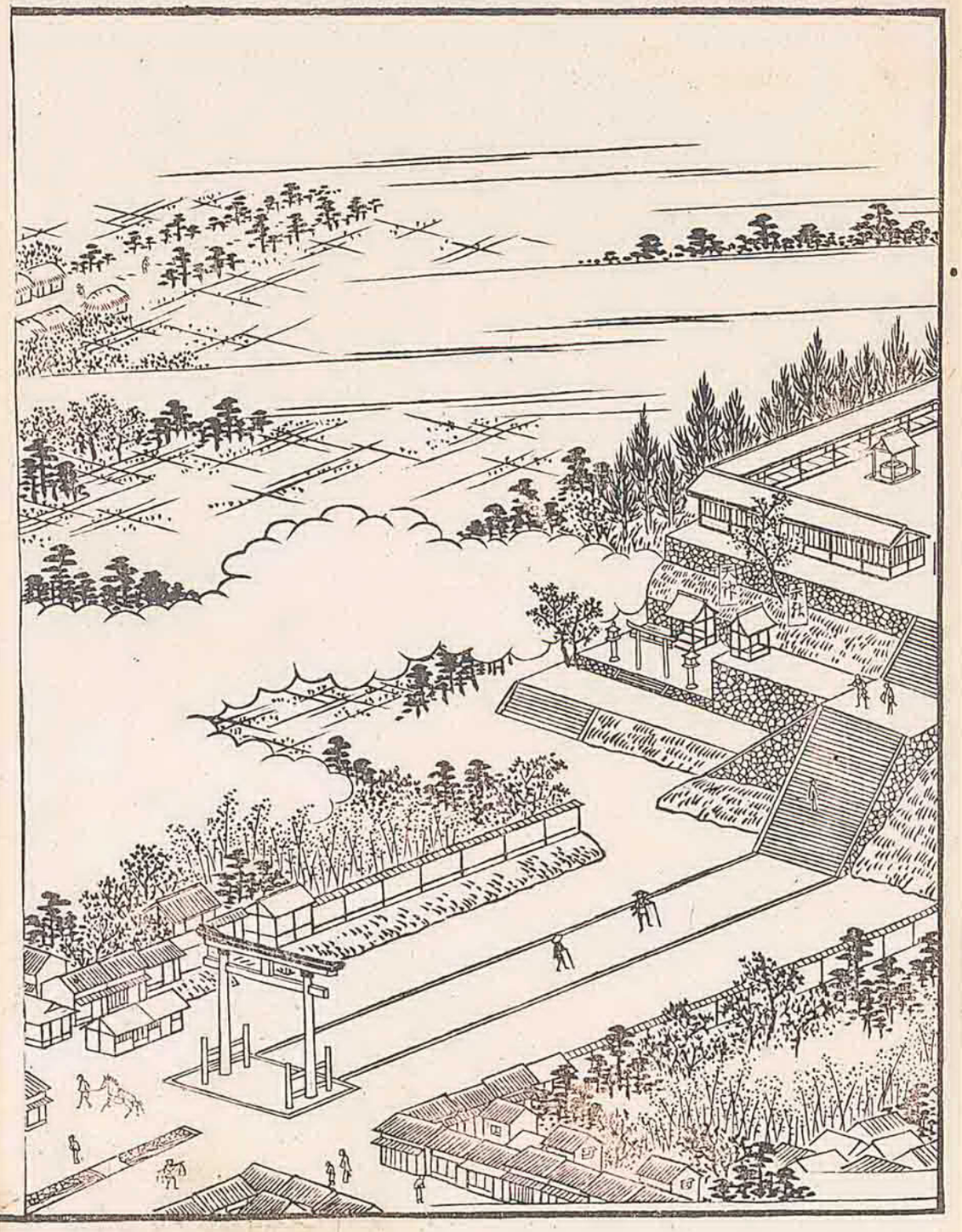
天神宮　日ふ石階の右ふ

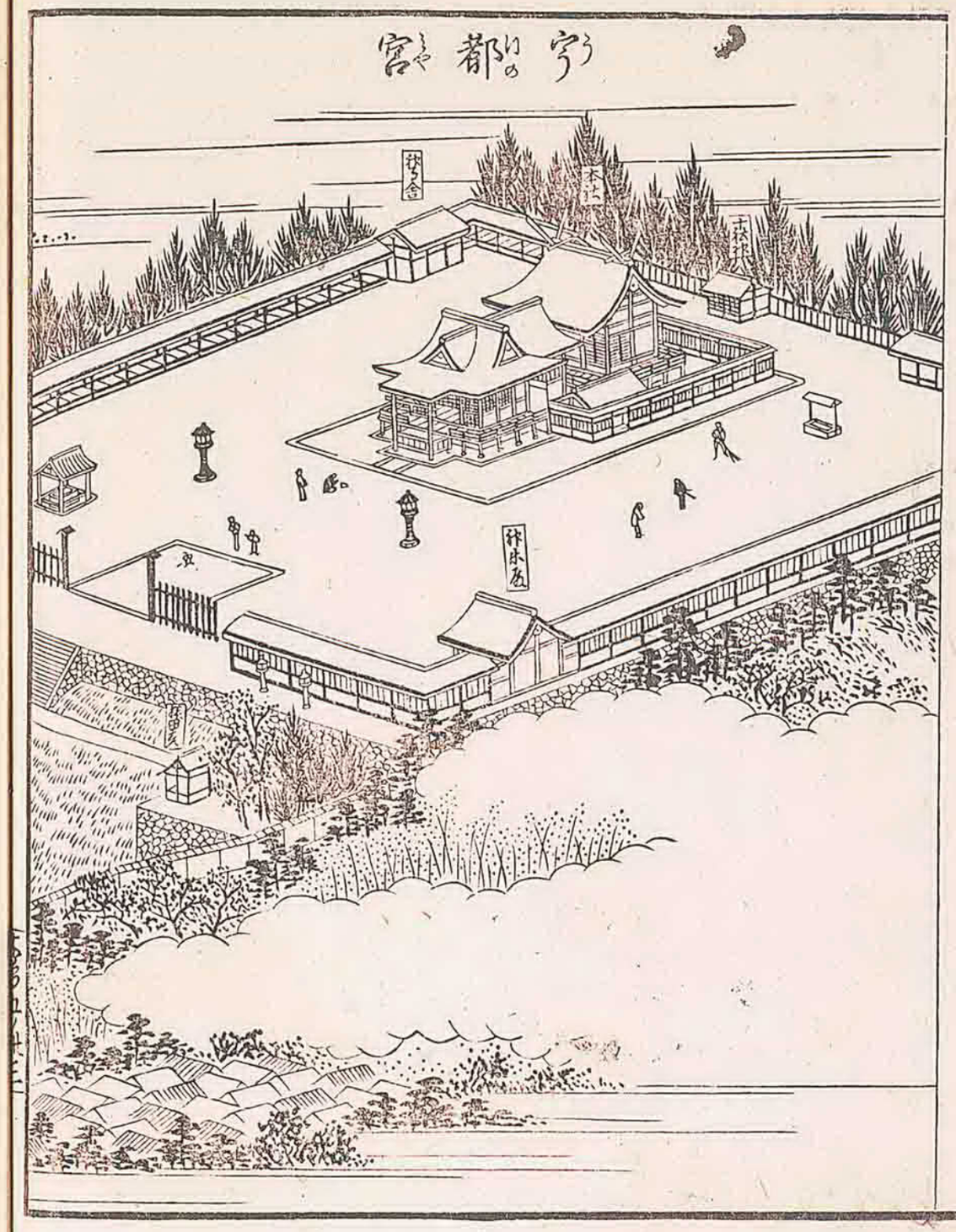
親音堂　門額ふ明治ふ

宇都宮乃販食人を立ふく所乃本より右の方乃ぢ日光道ふ左右の

道ふ人老枝乃並樹成ふて道を覆ふいつも夏ふ暑ふを此木陰を

通りて涼〜敷ふふ生ふ紙色ふ徒沢命て人那よりて此所ふて




宮都の宮

三里ヨリ又枝の並木松ヲ植タリ大沢ヲ所ヲヨイヨリ志ばゝ一湖ヲ人
此所まで八又武里ヨリ山下ヲ道平ラヲシテ左右の並木ヲ植タリ
なを右の並ヲシテ三枝ヲ次第ヲ山ヲ下ヲ流れ水ヲ流れ水ヲ
山ヲ下ヲ流ヲ今市ヲ所ヲ入ルヲ形ヲ舍ヲ
人家ヲ張ヲ賑ヲ宇陣販食ヲ拍子ヲ又市ヲ人ヲ家ヲ
ヲ市ヲ入口ヲ壬生通ヲ別ヲ道ヲ
衛道ヲ日光ヲ江戸ヲ三十四里ヲ宇都宮通ヲ三十六里ヲ
武里近ヲ道ヲ川ヲ今市ヲ日光ヲ入口ヲ石ヲ所ヲ
二里ヲ並木ヲ所ヲ農家ヲ道ヲ
日光ヲ
足利ヲ町ヲ山下ヲ
江戸ヲ
足利学校 東ノ方ヲ

足利 下野

門二重ヲ二乃門ヲ内ヲ孔子ヲ
廟ヲ其前ヲ海棠梅柳 梅 桃 柳 ヲ
廟南ヲ向ヲ面六間ヲ四間ヲ
ヲ前ヲ東階西階ヲ堂ヲ
座像ヲ長武尺五寸 ヲ
神主ヲ堂ヲ内ヲ前ヲ
ヲ神位ヲ小小房ヲ
宵前ヲ右ヲ其内ヲ小野堂ヲ
所ヲ小祠堂ヲ学校ヲ
く宝剣ヲ
憲実再ヲ学校ヲ
ヲ其所ヲ
遊孔ヲ

寺に学校を建て和漢の群書を蔵し儒書五部印仏書五部印を押す金沢文庫乃四文字を以て書に又管領源成氏より金沢も頗廃して書籍もみからもとく此文庫も名のみ残りそれより星霜ふりて近世に学校五二要和尚に依り足利の書を持て浴室一条寺に移さと三要い頗ぶる才辯ありて　将軍家へも伺候し世乃人こ称し学校こ号し此時　官家より植字一萬字を御寄附あり足利の学校に保持する儒の孫舎建長寺に住持す今も学校と称ど学徒絶絶五六人あり之れ儒書に勤学し此御廟に社領百石宮家より御寄附し聖堂を寛文年中に御建立あり其聖廟乃東の方に引き移し宮殿あり中に正面に孔子像を安し又其西に　国初将軍に御位牌あり

学校の東隣に虚空蔵寺あり大寺にて堂宇一西の方に高山あり号氏乃城跡あり此足利の所を西へ行ば大河あり渡らば頼朝こ称足利の

所に出づ此あり下野上野の國界あり之れ此川上足利より三里半奥に相生こと所あり蕨こと絹を多く織出せり相生こと絹の名よりて江戸及び諸國へ此地より出る

足利より上州梁田へ半里八本こと里こと田まで一里半こと田こと

本嶋へ　こと里三十町

こと田こと新田義貞乃古城あり此所即新田氏より此山城山有

ありて金山こと新田大炊介義宗より義貞中で居住こと

古平記云

上野国乃住人新田小こと郎義貞こと八幡こと郎義家十七代の後

胤源家嫡流の名家こ御ど平氏世こと平氏世こと四海みな威に伏する

所にこれを力なく関東の俘囚に金剛山の城あり此を向こ

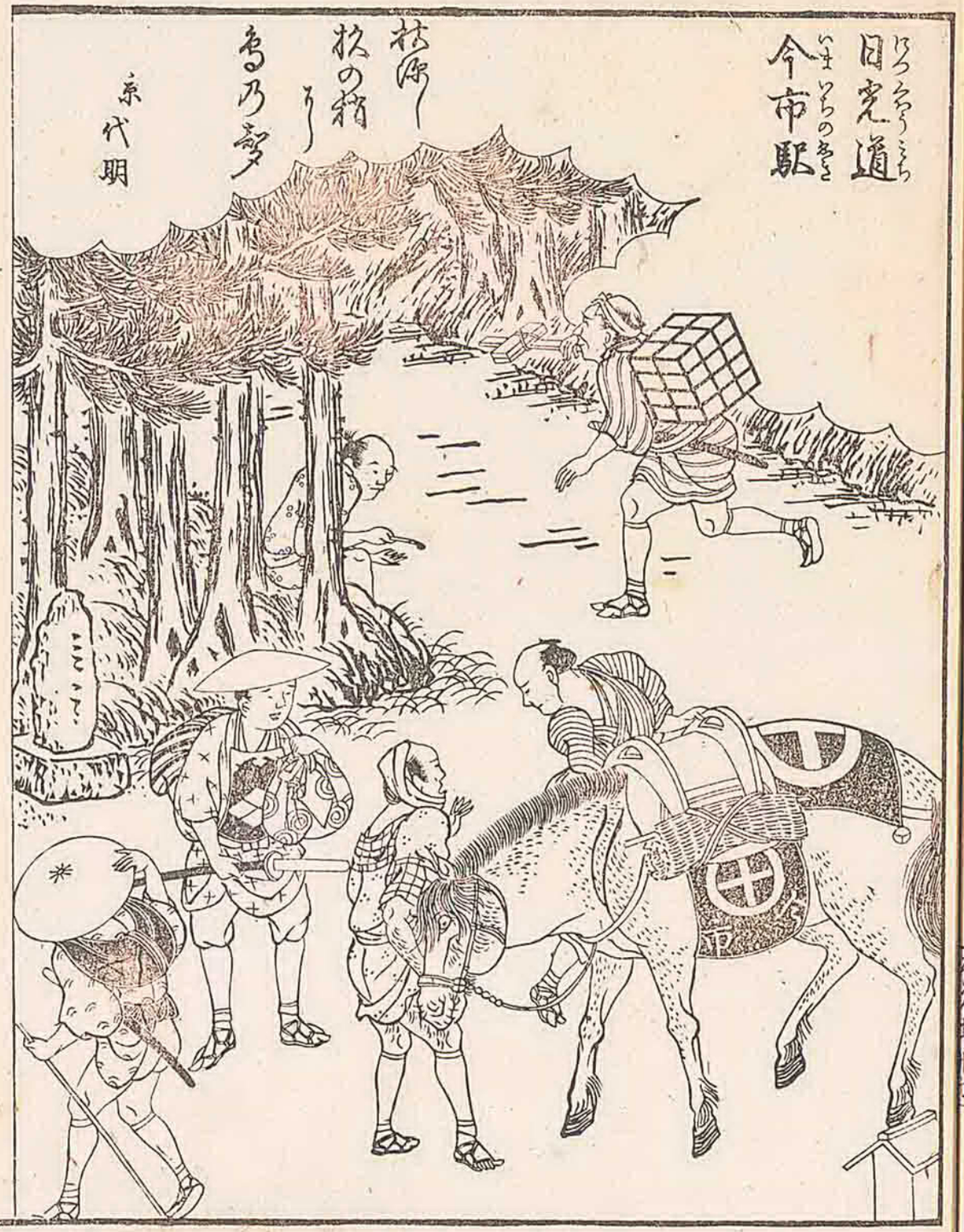
なること云ふ所なる本領こ出来にこんあり附執事紅田入乃義貞此近所

て宮殿こなこ入へこと源平こと家朝家にはこと平氏世こと

こと源氏これを亡ぼし紀源氏和上氏ありこと平氏こと滅を治し義貞

不肖なりしとは人ども尚衆れとんむしして傳代弓箭の名家けがせ家
御ゆゑ今相撲人長の切孫を見るに滅亡遠きにあらざる衆中國より
陪臣として義兵をあげ先祖の宸襟を中とあまんとなるべきの勅命を
蒙りて三日ばかりの間に大塔宮の令旨を賜わり山岳の山中に歩び
まべきを四海ひろわれば紅田八道畏くも大塔宮を山岳の山中に歩び
て海内ひろわれば義旨方便を絶ぶしく志令旨を中出し長
世幸盛まげ小外苦ゆて世のまど渡所へ陣とる甚空月紅田
世のれが美業に二十餘人野伏のすぐるに出てせく紅井ふぐき
の業へ世世我身と家切勢のまゆ城して紅ちぐれ勇ゆれ進ろ
ゑ一月まけだろ月士軍城でまろ家ろ家ろ勢の那乃那伏
ぐもまれを見ゑく味方れ好伏ぞく知力と合せんあふ伏の業
よりまを大合して迫つ伏ろ城紅田ぐ勢の中にろまく十一人
まで生捕てぐら紅田は生捕ぐる城毎ゆて紅ゆけるを

今海内武士ろうの中ある事合く徐ぜんあふあ氏新国家事迫
へ四ろく海嶽を上ん氏ふ合有あてけ山まぐれば海ふ
大塔宮の御左前城尋ゆ四んあ捕ぐる金塔ふ業内ふ
して山方の使を法まくふ宮の御座ある所へまとれば那伏九
ふ氏ふ怪びく真御ぐ氏あくらびて安ぐ事あくけ中に一人
ぐ氏ぐのいく氏ぐろ氏合ぐ出て進せんとやて紅
十人をぐ四ぐ武士人宮の御方へて我く氏ぐる今やく世相あよ
一日あて令旨城持あて城ぐて城ぐこれを見ぐふ合ぐあ
あて倫旨の文章に書れぐろ其詞ふいく
倫言氏ぐて日紀を敬萬國を撫ぐ方ぐ明君乃德形ぐ孔を治
く四海を鎮むる武士の節也須臾の間高時法師ぐ一新朝憲氏
形ひげ強ぐて怠ぐに逆域を振ふ積惡の辺ぐ天誅除ふあぐる
憂ふ累年の宸襟氏座ぐあんぐ為ふ將ぐ一擧の義兵を起んと



徹感応深く忠義何ぞ俊々たる関東征伐の謀をめぐらしく
天下静謐の功紙筆もべく者綸旨ぞ仍執達件
元弘三年二月十一日　左少将

新田小太郎殿

綸旨の文章家の眉目不使川原氏編云われば義貞斜ならぬ程く
其翌日より虚病して寺院にぞ籠れる
山の西南の方小義竜の寺あり大光院と号す寺院三百六十石附く僧徒
多く寄宿す郡司より此村西の義貞の一族家人乃左右多く
山を去田山の禁にあり脇屋邑を去田乃西本俣のゆよあり篠塚を去田
の東南ゆより世良田江田由良大館を去田と本俣村同名あり世良田を
道の辺ゆ小ある大村より大館を世良田乃東よりあり江田を三村あり
中江田を道の側ゆ有り由良も道のくさ有り大井田堀口洞川も此
竜ゆ有りみふこん義貞の一族家人の住せ左所し

上野 本郷

芝まで三里半十町本嵩の南半里徳川より一所あり松平の御先祖 徳川四郎義季此領ひしの所と其後代々此地を領し徳川村高二百石あり其所の農家清右衛門義貞の後裔新田隼人也

宮家より知行二百石下され徳川の近村田畑村を居住せしめ

或曰義貞の子孫岩松万次郎初め又百石下され岩松村を居住せ

しめ新田乃名字氏の芝の川を行石の渡しあり松平流れ渡る

利根川の別流にて桜川より流れ出るなり

上野 芝

五料まで壱里 芝と五料の間を利根川あり五料の方川の渡し

富部より伊香部あり

上野 五料

でゐ川貫通一里半宮部より芝まで厩橋八里利根川の上に赤木

山を厩橋の上に浮る山と浮名保乃沼も赤木山乃名所なり

倉加野まで三里此間を五料村と云所あり倉加野より東山

道乃幸渕道なり

下野 宮八幡

下野宮八幡ゆく五日光初石所より今市まで武里

今市より板橋まで武里 板橋より麻布まで三里六町

此間を文夾と云宿あり麻布より宗徒宗と宗徒宗より金橋まで壱里半 宗徒宗より金橋まで壱里半

金橋より左の方へ壱里半ばかり此地社村あり其邊を林あり

其間を通り橋あり

惣社大明神 これ下野の惣社なり

此邊一帯の家乃屋根は小瓦乃ごとくにして其の八ツ乃ごとくの

光ごとくにして地と平均なり今を盛り橋乃大サ凡壱丈弐尺

武間ばかり有其橋を板を生敷て乃橋のまわりを乃橋より水素出

煙乃ごとく立る紙貴駄しけること其村の人あり家を今を水

なれば煙も形ばかりなり

河花 いとくさ人あり

藤原実方墓

千載　五月雨は富士の八潟なれば田子の浦波のうらなみ　源行能朝臣
新古　郭公鳴くや五月の雨の中に波の上なる舟のうらなみ　後鳥羽院
新勅撰　雲の上に立ちぬ煙は富士の焼火を千年と見しは富士の八潟も　定家
続古　けぶりにぞ思ひ消えぬる富士の山の雪の消えぬ間　同
同　小野の富の八潟の水の浮かれ鳥の数にもあらぬ我が身かな　後人
文本　いづくにか富士の八潟の水鳥の数にもあらぬ我が身かな　後成
同　東路の富の八潟の水鳥の数にもあらぬ我が身かな　隆源
同　あはれなる富の八潟の水鳥の数にもあらぬ我が身かな　後人
山地は日光より小山に出る道なり此道の壬生より新ふちゝ富の八潟
より平柳とゝ成紙道にて橡木へいでゝ金橋より橡木へ
出合戦場を通りて富の八潟へ入る也里ばかりのまゝなり

合戦場 下野

合戦場より橡木まで壱里
富の八潟へ入る合戦場乃通ひあるく

橡木 下野

橡木より富田へ弐里

富田 下野

富田より犬伏まで三里
犬伏は佐野の内なり町長し農家ゝ大なるなり其家宅
市ゞ繁盛乃士小侍ゝ多し奇麗なる家多く横ゝ町の間の道ひゝ
鄙乃名ゞしき奇麗なる所なりこれより半里ばかり小山
賢徳理吉丈の城跡あり

犬伏 下野

犬伏より天明まで半里此間大畧町続き形り長く奇麗なる
町ゝ市を成し又裏町もなり町の内乃星宮ゝ高ゝ社
あり山地の生土形なり善昌寺ゝ通筋より裏町ゝ寺あり
往者渡河乃久能ゝなりゝ日光ゝ橡ゝ通りゝ元雲槻ゝ寺ゝ
二宿御道なり故ゝ寺院五十石なり沼ゝ
今の検地ゝ五百石なりゝ天明ゝ

栗谷城跡より天明釜とりつゝ瓶茶茗盛釜を用ひく貴ぶ名物とす
大伏見を天明ゆも梅花をして天明より鈴林まで弐里ありて鈴林を
川股まで壱里半川股より武列忠まで三里鈴林の沖城天和三年
七月沖除われども又家和記年再び築たるなり

梁田野

天明より梁田まで弐里半
足利へ行る梁田へゆく
天明より右の方へ行天明より足利へ三里半ありより足利より壱田と
称するより此道を梁田八本城通りて天明より足利へ行それより
壱田へ出る凡壱里程遠し天明より壱里行て足利のくゝりく
上列沼田へゆく道あり天明より沼田まで弐十二里あり沼田を
利根川乃上をうつれむ
所より今を城より一日光山乃うら後より岩瀬を所とゝ足利
よりまを新田へうつも沼田へ行る川ふちをそのゆく

足利より新田宗八幡天明ゆ遠く奥原氏の
遺稿城ありふ出たり
二子山 中地 河内郡あり
後撰 二子山ともふ越ひ出まを行うみ
安蘇川 は出は郡あり
新千 名ふまを安蘇のうゝふ引をくみ行乃沖ふ山も泊ら葬 蓮生法師

本曾路名所圖會卷之五 終

432
175

一本多五四十二